# 研 究 紀 要 22

# 目 次

山梨県出土の人面・土偶装飾付深鉢形土器	渡辺	誠	1
環礫方形配石遺構の復元について 一塩瀬下原遺跡敷石住居からー	末木	健	11
縄文時代の剥片剥離手法 一酒呑場遺跡出土黒曜石石核の分析からー	保坂	康夫	27
山梨県出土の畿内系叩き甕に関する覚書 一甲府市塩部遺跡の調査からー	小林	健二	35
笛吹市御坂町亀甲塚古墳出土管玉の再整理	石神	孝子	41
山梨県における月待信仰について -二十三夜和讃(一)	坂本	美夫	54 (1)

2006 山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財センター

このたび、山梨県立考古博物館ならびに山梨県埋蔵文化財センターにおける日頃の研究成果の一端を掲載した『研究紀要』第22号を刊行する運びとなりました。

今回は、6編の論文を掲載しました。巻頭の拙稿「山梨県出土の人面・土偶装飾付深鉢形土器」では、長野県とともに人面・土偶装飾付深鉢形土器の中心的地域である山梨県下の資料について、今まで発表したリストを整理し、特に分布に重点を置いて若干の検討を試みました。末木健「環礫方形配石遺構の復元についてー塩瀬下原遺跡敷石住居からー」では、大月市梁川町に所在する塩瀬下原遺跡から発見された環礫方形配石遺構について、上層の配石と下層にある敷石住居とを関連づけて検討を加えました。保坂康夫「縄文時代の剥片剥離手法ー酒吞場遺跡出土黒曜石石核の分析からー」では、北杜市長坂町に所在する酒吞場遺跡から出土した黒曜石石核について、剥片剥離のあり方を観察し、縄文時代の剥片剥離手法の復原を試みました。小林健二「山梨県出土の畿内系叩き甕に関する覚書ー甲府市塩部遺跡の調査からー」では、塩部遺跡における最新の調査成果をもとに、山梨県では出土例の少ない畿内系の叩き甕について検討しました。石神孝子「笛吹市御坂町亀甲塚古墳出土管玉の再整理」では、1948(昭和23)年に亀甲塚古墳から発見された管玉について、X線による写真撮影をもとに再整理しました。坂本美夫「山梨県における月待信仰について一二十三夜和讃(一)ー」では、都留市博物館「ミュージアム都留」図書室所蔵の和讃『なむあみだぶつ』の中に収められている二十三夜和讃を紹介し、都留市域で行われていた月待信仰の行事形態について考察しました。

県立考古博物館ならびに埋蔵文化財センターでは、埋蔵文化財の調査研究や保存・活用をとおして県民の皆様に山梨の歴史を理解していただけるよう創意工夫することが求められています。本誌が山梨の歴史を紐解く契機となり、より身近に地域の歴史を感じていただける場を県民の皆様に提供できるよう希望するとともに、各位からのご教示と忌憚のないご批判をいただけますようお願い申し上げます。

2006年 3月

山梨県立考古博物館館長山梨県埋蔵文化財センター所長

渡 辺 誠

# 山梨県出土の人面・土偶装飾付深鉢形土器

渡 辺 誠

1 はじめに

2 出土遺跡の分布

3 数量・分布と編年

4 おわりに

#### 1 はじめに

筆者は吉本洋子氏との共同研究として、人面・土偶(人体文を含む)装飾付土器のうち深鉢形土器について、その基礎資料の集成と若干の検討を行ない、『日本考古学』誌上に3度に亘って発表してきた(吉本・渡辺1994・99,2005)。その主要な成果は、それらの土器は山梨県が長野県とともに発達の中心地域であることと、死と再生観念の発達をよく示していると理解できるようになったことなどである

人面・土偶装飾付深鉢形土器は表1に示すように、北海 道西南部から岐阜県にかけての東北日本の453遺跡より750 点出土している。このうち遺跡数においては長野県がもっ とも多く112遺跡で、全体の約四分の一にあたる24.7%を 占め、山梨県はこれに次ぎ72遺跡で15.9%を占めている。 両県を合わせると約40%を占めている。隣接する東京都・神奈川県もこれらに近いが、点数においては大きな落差が ある。

遺跡数と同様にもっとも点数の多いのは長野県で、179点、23.9%を占め、次いで山梨県が168点、22.4%を占めている。遺跡数に比べると長野県とほぼ同数とみることができる。両県を合わせると約46%を占め、発達の中心地域であることを明示している。図1はこの数量分布を示すものであるが、従来発表してきた分布図と異なるのは、発達の中心地域を的確に示すため、面積の広い長野県を東信・北信・中信・南信とに分けて示したことである(図1)。

上記のように長野県全体で179点出土しているが、4地域ではそれぞれ6・1・28・144点で、南信が圧倒的に多い。南信地域は、茅野市・岡谷市、諏訪郡原村・富士見町、および伊那谷の諸市町村であるが、この点数に匹敵する県は山梨県のみで、大きな差はあるが東京都・神奈川県、および福島県がこれに次いでいる。そして、山梨県を中心に南信・東京都・神奈川県地域は、人面・土偶装飾付深鉢形土器の最盛期である、縄文中期前半の勝坂文化圏に相当する。

本稿は、この中心的地域である山梨県下の資料について、3回にわたって発表したリストを整理し、特に分布に重点を置いて若干の検討を試みるものである。

#### 2 出土遺跡の分布

山梨県出土の人面・土偶装飾付深鉢形土器は、72遺跡出土の168点である(表 2)。ただし本稿では分布の検討に重点を置いているので、その法量については省略した。これについては旧稿を参照して頂きたい。また写真についても各タイプの代表的な例のみとし、同様に旧稿を参照して頂きたい。

山梨県の人面・土偶装飾付深鉢形土器出土遺跡の分布は、図2に示すとおりであるが、それらは次の9群に分類される。

I群:県東部の上野原市などの地域。8遺跡、10点。

Ⅱ群:甲府盆地東部の甲州・笛吹市東部地域。13遺跡、 63点。

Ⅲ群:甲府盆地南部の笛吹市西部・旧中道町などの地域。9遺跡、18点。

Ⅳ群:甲府盆地中央低地域。1遺跡、1点。

V群:甲府盆地西北部の韮崎市・旧武川村などの地域。 10遺跡、26点。

Ⅵ群:茅ケ岳西麓・八ツ岳東南麓の北杜市地域。18遺跡、 41点。

Ⅲ群:長野県に接する旧小淵沢町地域。7遺跡、7点。Ⅲ群:甲府盆地西部の南アルプス市地域。3遺跡、4点。

Ⅸ群:県南部の旧富沢・南部町地域。2遺跡、2点。

以上によって、分布の主要地域は甲府盆地と茅ケ岳西麓・八ツ岳東南麓部であることが分かる。一方御坂山地と富士山の間は皆無であり、県南部地域にはごく僅かにしかみられず対照的である。巨視的にはⅡ・Ⅲ群地域と、V~Ⅷ群地域が特に注目される地域である。

そして発達の過程を知る上で重要な形態分類の基準は、図 2 に示すとおりである。それは人面の付く高さを示す I  $\sim$  I

まず人面の高さは、Ⅰは胴部に、Ⅱは口縁部直下に付き、 Ⅲは口縁部上に突出し、Ⅳはそれが立体化・中空化・大型

表 1 都道府県別人面・土偶装飾付深鉢形土器数量表

	遺跡数 (%)	資料数 (%)
北海道	3 (0.7)	3 (0.4)
青森	15 (3.3)	26 (3.5)
秋 田	3 (0.7)	3 (0.4)
山形	1 (0.2)	1 (0.1)
岩 手	9 (2.0)	10 (1.3)
宮城	4 (0.9)	9 (1.2)
福島	29 (6.4)	52 (6.9)
茨 城	6 (1.3)	6 (0.8)
栃 木	10 (2.2)	17 (2.3)
群馬	13 (2.9)	19 (2.5)
千 葉	8 (1.8)	11 (1.5)
埼 玉	24 (5.3)	32 (4.3)
東京	63 (13.9)	99 (13.2)
神奈川	42 (9.3)	52 (6.9)
新 潟	19 (4.2)	29 (3.9)
富山	1 (0.2)	1 (0.1)
山 梨	72 (15.9)	168 (22.4)
長 野	112 (24.7)	179 (23.9)
岐 阜	6 (1.3)	8 (1.1)
静岡	13 (2.9)	26 (3.3)
計	453 (100.0)	750 (100.0)

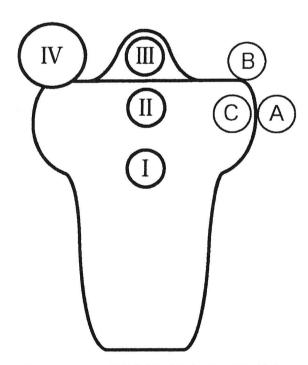


図3 人面・土偶装飾付深鉢形土器の分類基準図

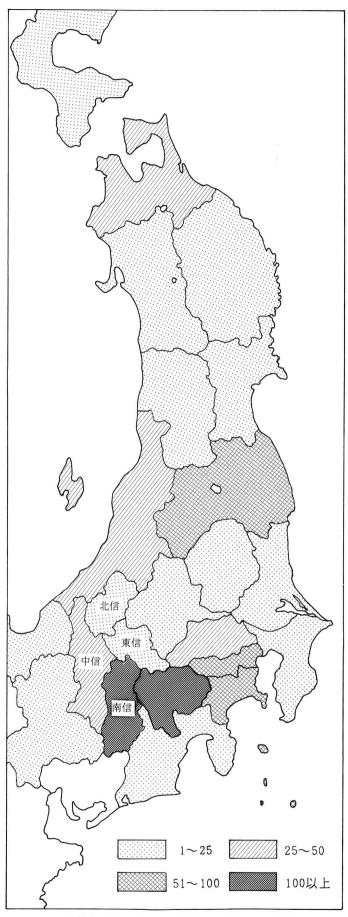


図 1 都道府県別人面・土偶装飾付深鉢形土器出土数 (長野県のみ細分)

表 2 山梨県出土の人面・土偶装飾付深鉢形土器一覧表 (1遺跡 2例漏れ、文末参照)

ŧ	遺跡番号	旧番号	遺跡名	タイプ	時期	文献	所蔵者・機関
	1	149	南都留郡道志村神地遺跡	IV D	勝坂Ⅱ式	江坂1974、中村・奥1974	都留市教委
	2	追127	上野原市狐原遺跡	ΝD		未報告	上野原市教委
	3	150	上野原市(旧上野原町)本町遺跡	ШD		仁科1935	不明
	4	追129	上野原市上野原小学校遺跡1	IV C	藤内式	小西1993	上野原市教委
			上野原市上野原小学校遺跡2	IVB	井戸尻Ⅲ式	小西1993	上野原市教委
	5	追128	上野原市大堀Ⅱ遺跡	IVC	藤内式	奥山1998	同遺跡調査団
		151	上野原市(旧上野原町)大堀Ⅱ遺跡	IVC	中期	未報告	F 3/22/3 B-13111
	6	152	上野原市(旧上野原町)西原田和遺跡	V	1 794	中村1970	不明
	7	153	大月市富浜町宮谷遺跡	ШС	勝坂Ⅰ式	谷口他1966	山本寿々夫氏
	8	追61	都留市九鬼Ⅱ遺跡	IV A	井戸尻Ⅲ式	高野他1996	山梨県埋文
_	9	155	甲州市(旧塩山市竹森)乙木田遺跡	IV D	勝坂Ⅲ式	上川名1971	不明
	10	154	甲州市(旧塩山市日森)乙不田遺跡   甲州市(旧塩山市中萩原)柳田遺跡1(北原)	IV D IV C	勝坂Ⅱ式	上川名1971	不明
	10	134			勝坂Ⅱ式	上川名1971	不明
		150	甲州市(旧塩山市中萩原)柳田遺跡2(北原)	IV C			' ' '
	11	156	甲州市(旧塩山市)安道寺遺跡1	ND WG	勝坂Ⅱ式	小林1978	山梨県立考古博
			甲州市(旧塩山市)安道寺遺跡2	IV C	勝坂Ⅱ式	小林1978	山梨県立考古博
			甲州市(旧塩山市)安道寺遺跡3	IV C	勝坂Ⅲ式	小林1978	山梨県立考古博
	12	追130	甲州市(旧塩山市)大木戸遺跡1	II A	五領ヶ台式	石神他2003	山梨県埋文
			甲州市(旧塩山市)大木戸遺跡2	ШC	新道式	石神他2003	山梨県埋文
			甲州市(旧塩山市)大木戸遺跡3	IVΑ	五領ヶ台式	石神他2003	山梨県埋文
			甲州市(旧塩山市)大木戸遺跡4	IV C		石神他2003	山梨県埋文
	13	157	甲州市(旧塩山市)上於曽遺跡	IV C	勝坂Ⅱ式	野中1904	東大総合資料館
	14	158	甲州市(旧塩山市)岩堂遺跡	IV C	勝坂Ⅱ式	仁科1935	内田周明氏
	15	追131	山梨市高畑遺跡	DIIA	井戸尻Ⅱ式	未報告	山梨市教委
	16	159	甲州市(旧勝沼町)小佐手遺跡	ND	勝坂Ⅲ式	鳥居1924	不明
	17	160	甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡1	IV D		未報告	甲州市教委
			甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡2	IV D		未報告	甲州市教委
			甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡3	IVC	勝坂Ⅱ式	未報告	甲州市教委
			甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡4	II A	<b>狢沢式</b>	未報告	釈迦堂遺跡博
			甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡5	II A	<b>洛沢式</b>	未報告	甲州市教委
			甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡6	II A	狢沢式	未報告	甲州市教委
			甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡7	ΠA	<b>狢沢式</b>	未報告	甲州市教委
			甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡8	ΠA	<b>洛沢式</b>	未報告	甲州市教委
			甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡9	II A	五領ヶ台~狢沢式	未報告	甲州市教委
	18	161	笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区1	IΙΑ	井戸尻式	小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区2	ND	717 % 25 1	小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区3	IVD		小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区4	IVD		小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区5	IID	中期	小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区6	II A	中期	小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区7	II A	中期	小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区8	IVA	中期前半	小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区9	II A	中期	小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区10	IV D		小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区11	IV D	BW III D	小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区12	IV C	勝坂Ⅱ式	小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区13	IV D		小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区14	IV D		小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区15	IV D		小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区16	II A	井戸尻Ⅲ式	小野1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区17	IIΑ	狢沢式	山梨考古博2004	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区18	ΠA	狢沢式	山梨考古博2004	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群塚越北A地区	DⅢC	中期前半	小野1986	釈迦堂遺跡博
		1	笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群塚越北B地区	ΠA	五領ヶ台式	小野1986	釈迦堂遺跡博
	1		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群野呂原地区1	ND		長沢1987	釈迦堂遺跡博

			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群野呂原地区2	IV C		長沢1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群野呂原地区3	ШD	中期	長沢1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群野呂原地区4	IVC	勝坂Ⅱ式	長沢1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群野呂原地区5	IVC	勝坂Ⅱ式	長沢1987	釈迦堂遺跡博
		1	笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群野呂原地区6	ND		長沢1987	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群野呂原地区7	IV C	勝坂Ⅱ式	畑1983	釈迦堂遺跡博
			笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群野呂原地区8	IVA	井戸尻式	長沢1987	釈迦堂遺跡博
			   笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群野呂原地区9	ΠA	五領ヶ台式	長沢1987	釈迦堂遺跡博
	19	追62	笛吹市(旧御坂町)桂野遺跡1	ND.	井戸尻式	望月他1999	笛吹市教委
		追62	   笛吹市(旧御坂町)桂野遺跡2	DIVC	藤内~井戸尻式	望月他1999	笛吹市教委
		追62	   笛吹市(旧御坂町)桂野遺跡3	l IV C	井戸尻式	望月他2004	笛吹市教委
		追62	   笛吹市(旧御坂町)桂野遺跡4	l ⊪A	五領ヶ台式	望月他2004	笛吹市教委
		追62	笛吹市(旧御坂町)桂野遺跡5	IV D	新道式	望月他2004	笛吹市教委
	20	162	笛吹市(旧御坂町)上黒駒遺跡	IVC	勝坂Ⅱ式	谷口1959	笛吹市教委
	21	163	笛吹市(旧境川村)一の沢西遺跡1	IVC	勝坂Ⅱ式	長沢・中山1986	山梨県立考古博
		163	笛吹市(旧境川村)一の沢西遺跡2	IVC	勝坂Ⅱ式	長沢・中山1986	山梨県立考古博
	22	追132	笛吹市(旧境川村)西原遺跡1	IVC	井戸尻式	野崎2002	笛吹市教委
			笛吹市(旧境川村)西原遺跡2	IVC	藤内式	野崎2002	笛吹市教委
			笛吹市(旧境川村)西原遺跡3	DIIC	中期	野崎2002	笛吹市教委
	23	追133	笛吹市(旧境川村)金山遺跡1	ПС	新道式	野崎2002	笛吹市教委
		-	笛吹市(旧境川村)金山遺跡2	ШС	藤内式	野崎2002	笛吹市教委
	24	164	笛吹市旧境川村方面	IV D	Jane I diene	未報告	山寺仁太郎氏
	25	167	甲府市(旧中道町)上ノ平遺跡1	ND	井戸尻式	中山1987	山梨県立考古博
$_{\rm I}$		41	甲府市(旧中道町)上ノ平遺跡2	III A	五領ヶ台式	村石1994	山梨県埋文
		41	甲府市(旧中道町)上ノ平遺跡3	ND.	井戸尻式?	未報告	山梨県埋文
	26	165	甲府市(旧中道町)村上遺跡	IVC	井戸尻Ⅲ式	長沢·中山1986	山梨県立考古博
	27	166	甲府市(旧中道町)上ノ原遺跡	IV D	717 //um.zv	中道町1972	青山学院大
	28	追63	甲府市(旧中道町)後呂遺跡1	IVC	曽利Ⅰ式	未報告	甲府市教委
		追63	甲府市(旧中道町)後呂遺跡2	IVA	井戸尻式	未報告	甲府市教委
		追63	甲府市(旧中道町)後呂遺跡3	IVC	井戸尻式	未報告	甲府市教委
	29	追134	中央市(旧豊富村)駒平遺跡1	ΠA	中期初頭	岡野1988	中央市教委
			中央市(旧豊富村)駒平遺跡2	ΠA	中期初頭	岡野1988	中央市教委
V	30	168	甲府市上石田遺跡	IV D	勝坂Ⅲ式	上川名1977	不明
1	31	169	甲斐市(旧双葉町)塩崎遺跡	IV D		中村1979	不明
	32	170	   韮崎市宮久保飯米場遺跡1	IV D		中村1979	三枝善衛氏
		170	韮崎市宮久保飯米場遺跡2	ND		中村1979	不明
		170	韮崎市宮久保飯米場遺跡3	V		中村1979	不明
		171	韮崎市宮久保飯米場遺跡4	DNC	勝坂Ⅱ式	柴田1910	東京国立博
	33	172	   韮崎市坂井遺跡1	IV C	勝坂Ⅱ式	志村1965	坂井考古館
		172	董崎市坂井遺跡2	DIVC	勝坂Ⅱ式	志村1965	坂井考古館
		172	韮崎市坂井遺跡3	DWD	中期前半	志村1965	坂井考古館
		172	韮崎市坂井遺跡4	IVC	勝坂Ⅱ式	志村1965	坂井考古館
	34	173		IVC	勝坂Ⅰ式	志村1965	坂井考古館
	35	174		IVC	勝坂Ⅱ式	中山・丸山1994	山梨県立考古博
	36	追141	董崎市石之坪遺跡1	D∭A	44.00.11.21	櫛原他2000	韮崎市教委
7			韮崎市石之坪遺跡2	ΙA	<b>洛沢式</b>	閏間他2001	韮崎市教委
			韮崎市石之坪遺跡3	ΙA	曽利式	閏間他2001	韮崎市教委
			韮崎市石之坪遺跡4	ΠA	五領ヶ台式	国間他2001 国間他2001	韮崎市教委
			韮崎市石之坪遺跡5	IV A	新道式	国間他2001	韮崎市教委 韮崎市教委
			韮崎市石之坪遺跡6	IV C	井戸尻式	閨間他2001	韮崎市教委
			韮崎市石之坪遺跡7	IV D	井戸尻式	国間他2001 国間他2001	韮崎市教委 韮崎市教委
	37	追143	北杜市(旧武川村)東原B遺跡	ШC	新道式	未報告	北杜市埋文
	38	追144	北杜市(旧武川村) 京原 5 夏跡   北杜市(旧武川村)向原遺跡1	m С IV В	井戸尻式	未報告	北杜市埋文
	50	/CITT	北杜市(旧武川村)向原遺跡2	IV B IV C	中期	未報告	北杜市埋文
			北杜市(旧武川村)向原遺跡3	IV D	井戸尻式	未報告	北杜市埋文
			北杜市(旧武川村)向原遺跡4	IV C	井戸尻式	未報告	北杜市埋文
	39	2自149	北杜市(旧武川村)  国家遺跡4 北杜市(旧武川村)実原A遺跡1	II A	五領ヶ台式	未報告	北杜市埋文
	₹4						

_			北杜市(旧武川村)実原A遺跡2	III C	新道式	未報告	北杜市埋文
	40	175	北杜市(旧明野村)上手遺跡	V		中村1970	不明
	41	追65	北杜市(旧明野村)平林遺跡	IV C	井戸尻式	佐野1997	北杜市埋文
	42	追135	北杜市(旧明野村)諏訪原遺跡	DIIA	新道式	佐野2004	北杜市埋文
	43		北杜市(旧須玉町)上ノ原遺跡	ШC	称名寺Ⅱ		北杜市埋文
	44	176	北杜市(旧須玉町)下津金遺跡	IV C	勝坂Ⅱ式	小林1954	不明
	45	177	北杜市(旧須玉町)御所前遺跡1	IV C	勝坂Ⅲ式	山路他1987	北杜市埋文
		177	北杜市(旧須玉町)御所前遺跡2	II A	中期末	未報告	北杜市埋文
	46	追136	北杜市(旧高根町)下原遺跡	IVC	井戸尻式	未報告	北杜市埋文
	47	178	北杜市(旧髙根町)安都玉横森遺跡	IV C	中期	中村1970	不明
	48	追66	北杜市(旧高根町)当町遺跡1	ΠA	狢沢式	雨宮1987	北杜市埋文
		追66	北杜市(旧高根町)当町遺跡2	II A	狢沢式	雨宮1987	北杜市埋文
		追66	北杜市(旧高根町)当町遺跡3	II A	狢沢式	雨宮1987	北杜市埋文
		179	北杜市(旧高根町)当町遺跡4	ND	勝坂Ⅰ式	谷口1967	不明
	49	追67	北杜市(旧高根町)海道前C遺跡1	IVC	井戸尻式	未報告	山梨県埋文
		追67	   北杜市(旧高根町)海道前C遺跡2	IV C	井戸尻式	未報告	山梨県埋文
	50	追68	   北杜市(旧高根町)宮の前遺跡1	ΠA	新道式	未報告	北杜市埋文
	51	追68	北杜市(旧高根町)西ノ原遺跡	IVC	井戸尻式	未報告	北杜市埋文
	52	追68	北杜市(旧高根町)新井遺跡	IVC	井戸尻式	未報告	北杜市埋文
	53	追70	北杜市(旧大泉村)古林Ⅳ遺跡	IV C	井戸尻I式	未報告	北杜市埋文
	54	追71	北杜市(旧大泉村)甲ッ原遺跡1	II A	新道式	山本他1996	山梨県埋文
	01	追71	北杜市(旧大泉村)甲ッ原遺跡2	ND ND	井戸尻式	山本他1996	山梨県埋文
		追71	北杜市(旧大泉村)甲ッ原遺跡3	ПС	中期前半	山本他1996	山梨県埋文
		追71	北杜市(旧大泉村)甲ッ原遺跡4	ШВ	洛沢式	山梨考古博2004	山梨県埋文
		追71	北杜市(旧大泉村)甲ッ原遺跡5	IV A	井戸尻式	山梨考古博2004	山梨県埋文
	55	追72	北杜市(旧大泉村)寺所第2遺跡1	DIIC	洛沢式	伊藤1996	北杜市埋文
	55	追72	北杜市(旧大泉村)寺所第2遺跡2	II A	新道式	伊藤1996	北杜市埋文
		追72 追72	北杜市(旧大泉村)寺所第2遺跡3	II A	新垣式     狢沢式	未報告	北杜市埋文
		追72 追72	北杜市(旧大泉村)寺所第2遺跡4	II C	% 務沢式	未報告	北杜市埋文
		追72 追72	北杜市(旧大泉村)寺所第2遺跡5	IV C	% 務沢式	未報告	北杜市埋文
			北杜市(旧大泉村)寺所第2遺跡6		% 務沢式		
		追72	北杜市(旧大泉村)寺所第2遺跡7	III C IV C	藤内式	未報告	北杜市埋文
		追72					北杜市埋文
		追72	北杜市(旧大泉村)寺所第2遺跡8	D∭C	新道式	未報告	北杜市埋文
	F.C.	追72	北杜市(旧大泉村)寺所第2遺跡9	IV C	井戸尻式	· ·	北杜市埋文
	56	追137	北杜市(旧長坂町)原町農高前遺跡1	IV C	新道式	未報告	山梨県埋文
			北杜市(旧長坂町)原町農高前遺跡2	IV C	井戸尻Ⅰ~Ⅱ式	未報告	山梨県埋文
		)rft ao	北杜市(旧長坂町)原町農高前遺跡3	IV C	新道式	未報告	山梨県埋文
	57	追69	北杜市(旧長坂町)酒呑場遺跡1	II A	中期前半	野代他1997	山梨県埋文
		追69	北杜市(旧長坂町)酒呑場遺跡2	IV D	井戸尻式	野代他1997	山梨県埋文
		追69	北杜市(旧長坂町)酒呑場遺跡3	IV D	井戸尻式	野代他1997	山梨県埋文
		追69	北杜市(旧長坂町)酒呑場遺跡4	IA	井戸尻式	野代他1997	山梨県埋文
-		追69	北杜市(旧長坂町)酒呑場遺跡5	III A	新道式	小宮山1998	北杜市埋文
	58	181	北杜市(旧小淵沢町)宮久保遺跡	IV C	藤内Ⅱ式	藤森1968	井戸尻考古館
	59	182	北杜市(旧小淵沢町)高野淵平遺跡	IV C	中期	船窪1930	不明
	60	183	北杜市(旧小淵沢町)岩久保遺跡	IV D		武藤1962	不明
[ ]	61	184	北杜市旧小淵沢町内	V		中村1970	不明
	62	追138	北杜市(旧白州町)上小用遺跡群	IVC	新道~藤内式	未報告	北杜市埋文
	63	追73	北杜市(旧白州町)雑木遺跡	ΠA	十三菩提式	杉本1997	北杜市埋文
	64	185	北杜市(旧白州町)鳳来遺跡	IVC	勝坂Ⅱ式	志村1965	山寺仁太郎氏
	65	追139	南アルプス市(旧櫛形町)北浦C遺跡1	IV C	井戸尻式	未報告	南アルプス市教委
I			南アルプス市(旧櫛形町)北浦C遺跡2	IV C	井戸尻式	未報告	南アルプス市教委
	66	追140	南アルプス市(旧櫛形町)長田口遺跡	ΠA	五領ヶ台式	山下他2000	山梨県埋文
	67	追64	南アルプス市(旧櫛形町)鋳物師屋遺跡	DⅢC	藤内I式	清水1998	南アルプス市教委
	68	186	南巨摩郡旧富沢町城台遺跡	IV D	井戸尻式	山本1971	南部町教委
	69	追145	南巨摩郡南部町天神堂遺跡	ΠA	井戸尻式	櫛原2004	南部町教委
	70	187	県下	DIVC	勝坂式	未報告	小淵沢小
+							

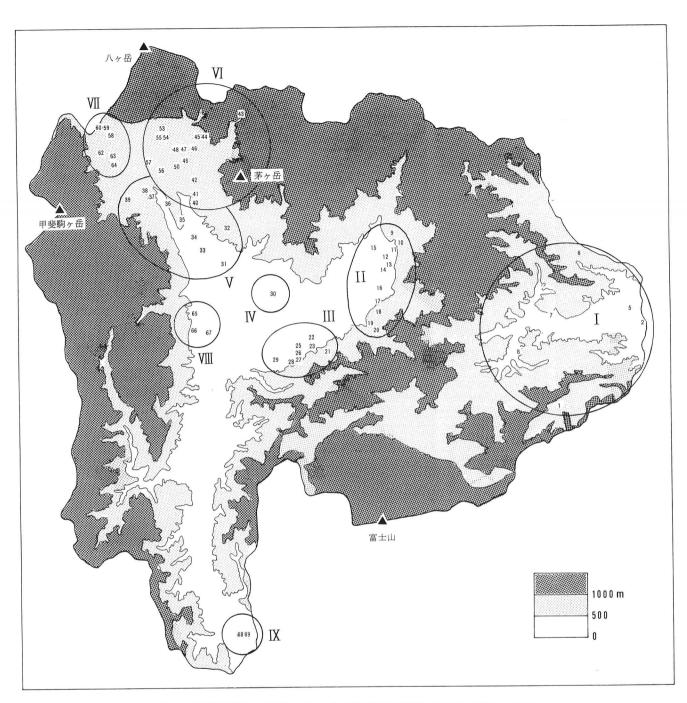


図 2 山梨県下における人面・土偶装飾付深鉢形土器出土遺跡と群別

化したものを示している。ただし I は IV に伴って出現することが、編年上明らかである。典型的な例は、北杜市須玉町津金御所前遺跡出土土器であるが、突出した人面は他のタイプと同様に女神であるのに対し、 I はその子供神とみることができる。

次に人面の向きは、Aは外、Cは内を向いているが、Bは内外両面に付いている。したがってⅡは、ⅡA類しかみられず、次いでⅢA類になって、ⅢC・ⅢB類などのバラエティーが生まれてくるのである。

#### 3 数量・分布と編年

人面・土偶装飾付土器の各タイプと群別との関係は、表

3に示すとおりである。

これを編年的にみれば、まず前期末の十三菩提式期にⅡ A類が出現し、中期初頭の五領ケ台式、狢沢式になるとⅡ A類が急増し、Ⅲ A類も出現発達する。そしてこれに次ぐ中期前半の勝坂・藤内・井戸尻式期は、Ⅳ類の最盛期である。

II A類が前期末に出現したのは、II 群の北杜市白州町雑木遺跡であるが、中期初頭になるとI ・IV 群を除く全域に拡散する。しかしII 類になるとI 群にみられるようになる一方、II ・II 群にはみられなくなる。またII ・II 群の数量が増加する。そしてIV 類は全域にみられるようになるが、II ・II 群の優勢は継承され、II ・III ・III ・IIII で



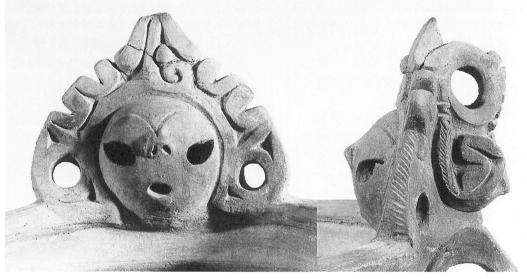


写真 1 人面・土偶装飾付深鉢形土器の諸形態 1: I A類(酒呑場遺跡第 4 例), 2: II A類(寺所第 2 遺跡第 1 例) 3: II A類(酒呑場遺跡第 5 例), 4: IV C類(海道前C遺跡第 1 例)

表 3 群別人面·土偶装飾付深鉢形土器数量表

群	遺跡数	資料数				分	類別数	量			
411	退吩奴	貝们奴	I	$\Pi$	Ш	IV	V	DΙ	DΠ	D∭	DIV
I	8	10			2	7	1				
II	12	58		13	7	35			1	1	1
Ш	9	18		1	4	12			1		
IV	1	1				1			10		
V	10	26	2	1	3	14	1			1	
VI	18	41	1	10	5	21	1		1	2	3
VII	7	7		1		5	1				
VIII	3	4		1		2				1	
IX	2	2		1		1					
県内	1	1									1
計	71	168	3	28	21	98	4	0	3	5	5

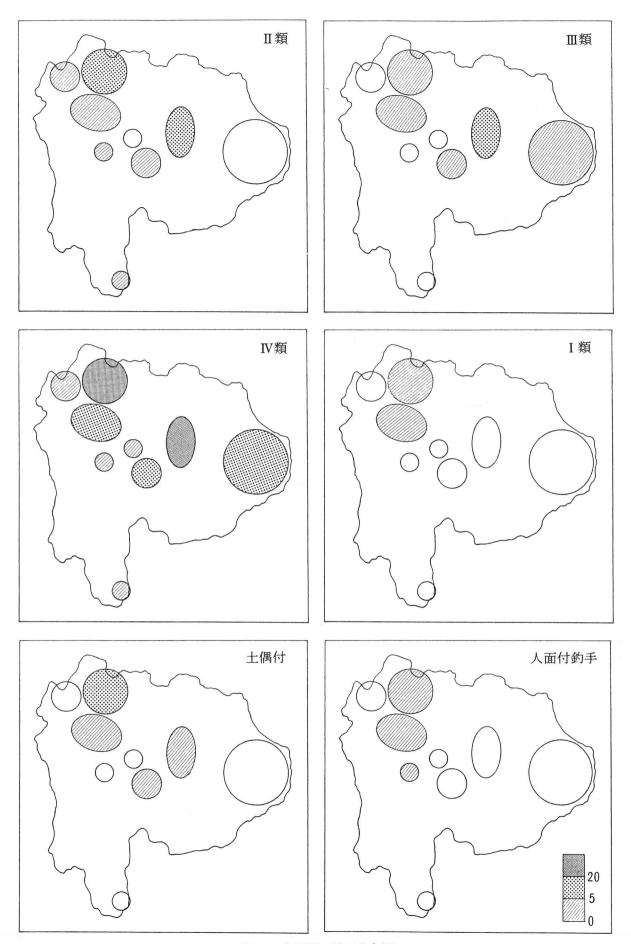


図 4 各形態の群別分布図

いる。そうした傾向のなかで、 $\mathbb{N}$ 群にもはじめて $\mathbb{N}$ 類が分布するようになる。また  $\mathbb{I}$  類も、 $\mathbb{V}$  ・  $\mathbb{N}$ 群にみられるようになる(図  $\mathbb{S}$  )。

すなわち甲府盆地から八ツ岳東南麓にかけての、Ⅱ~Ⅲ群地域が重要地域であることが明らかである。土偶付土器もこの地域内に分布している。また人面装飾付釣手土器も、このなかのV・Ⅵ群とⅧ群とにみられ(渡辺 1995)、この地域の重要性がさらにはっきりと示されている。

#### 4 おわりに

そもそも人面・土偶装飾付土器の重要性は、「死と再生」の観念の出現発達と、日本人の精神世界の源流を示唆するものと理解されるからである(渡辺2004他)。このことをさらに明確にするために、形態観察・出土状態の検討などをさらに詳しく行なわなければならない。しかも山梨県はその発達の中心地域であるから、他地域よりも研究について大きな役割を果たしていく必要がある。

そして本稿において重要地域が限定されてきたが、その 隣接地域として長野県の南信地域も同様に重要であり、今 後両地域をあわせて検討を進める必要がある。

そしてなによりも、「死と再生」観念の出現発達を促した生業の基盤を、真摯に追求して必要がある。当然藤森栄一氏の中期農耕論を避けては通れない。この問題は土器偏重研究の陰に隠れ、一部の研究者を除きほとんど無視に近い状況である。全体的に縄文研究の改善を進めていきたいものである。

#### 謝辞

本稿をまとめるに際し、多くの方々の御教示と御協力を仰いだ。とりわけ筆者たちの目的に沿った撮影を行なうために、諸先生・諸兄姉、および諸機関の暖かいご配慮を仰いだ。末尾ながら銘記して、深謝の意を表する次第である(五十音順、敬称略)

秋山圭子·雨宫正樹·新井正樹·伊藤公明·出月洋文·伊野和紀·閏間俊明·岡野秀典·岡部昌晃·奥山和久·小野正文·小林和広·坂口広太·佐野 隆·志村富三·末木健·杉本 充·瀬田正明·芹沢 昇·田代 孝·谷口一夫·田原良信·長沢宏昌·中山誠二·奈良泰史·新津健·新津多惠·野崎 進·野代幸和·野本孝明·秦野昌明·林部 光·宫脇実美·村松佳幸·村山美春·室伏徹·目黒明彦・望月和幸·山路恭之助·山下孝司·山寺仁太郎·山本寿々雄·吉田泰幸·吉本洋子·和田和哉

旧明野村教育委員会・上野原町遺跡調査団・旧上野原町教育委員会・上野原市教育委員会・旧大泉村教育委員会・旧勝沼町教育委員会・旧境川村教育委員会・旧櫛形町教育委員会・釈迦堂遺跡博物館・旧須玉町教育委員会・旧高根町教育委員会・都留市教育委員会・旧豊富村教育委員会・旧長坂町郷土資料館・旧中道町教育委員会・南部町教育委員会・正台州町教育委員会・笛吹市教育委員会・北杜市教育委員会・旧御坂町教育委員会・南アル

プス市教育委員会・旧武川村教育委員会・山梨県立考古博 物館・山梨県埋蔵文化財センター・山梨市教育委員会

#### 引用文献目録(五十音順)

雨宮正樹 1987『西原遺跡・当町遺跡』

石神孝子他 2003『大木戸遺跡』『山梨県埋蔵文化財セン ター調査報告書』第205集

伊藤公明 1996「寺所第2遺跡」『北巨摩市町村文化財担 当者会年報』平成7年度

閏間俊明他 2001『石之坪遺跡・西地区』

岡野秀典 1988『駒平遺跡』『豊富村埋蔵文化財調査報告 書』第7集

奥山和久 1998「大堀Ⅱ遺跡」『山梨県史』資料編1

小野正文 1986『釈迦堂Ⅰ』『山梨県埋蔵文化財センター 調査報告書』第17集

同 1987『釈迦堂Ⅱ』同第21集

上川名昭 1971『甲斐北原・柳田遺跡の研究』

同 1977『上石田遺跡』

櫛原功一 2004「土偶付土器の発見・天神堂遺跡(南部町) の調査成果」『帝京大学山梨文化財研究所報』第48集

同 他 2000『石之坪遺跡・東地区』

小西直樹 1993『上野原小学校遺跡』『上野原町埋蔵文化 財調査報告書』第6集

小林知生 1954「山梨考古資料」『山梨大学学芸学部研究 報告』第5号

小林広和 1978『安道寺遺跡』

小宮山隆 1998『酒吞場遺跡 G 地区』『長坂町埋蔵文化財調査報告書』第11集

佐野 隆 1997「平林遺跡」『八ヶ岳考古』平成7年度年 報

同 2004「明野町諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古』平成 15年度年報

柴田常恵 1910「人面を付せる石器時代の土器把手」『東京人類学雑誌』第26巻296号

清水 博 1998「鋳物師屋遺跡」『山梨県史』資料編1 志村滝蔵 1965『坂井』

杉本 充 1997『雑木遺跡』

高野玄明他 1996『九鬼Ⅱ遺跡』『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第118集

谷口一夫 1959「黒駒発見の中期縄文土器」『富士国立博 物館研究報告』第2号

同 1967「八ヶ岳東南麓の中期縄文式土器・山梨県 北巨摩郡高根町北割遺跡出土の土器について」『甲斐考 古』第2号

同 他 1966「宮谷B地区出土の顔面把手」『中央自動 車道東京・富士吉田線の新設に伴う発掘調査報告書』

鳥居龍蔵 1924『諏訪史』第1巻

長沢宏昌 1987『釈迦堂Ⅲ』『山梨県埋蔵文化財センター 調査報告』第22集 同・中山誠二 1986『一の沢西遺跡・村上遺跡・後呂遺 跡・浜亥井場遺跡』『山梨県埋蔵文化財センター調査報 告』第16集

中道町教育委員会 1972『甲斐の国中道町の文化財』 中村日出男 1970「顔面把手1」『郵政考古』第1号 同 1979「顔面把手5」同第5号

同・奥 孝行 1974「山梨県道志村神地出土の顔面把手」 『考古学ジャーナル』第92号

中山誠二 1987『上の平遺跡』

同・丸山哲他 1994『宿尻遺跡』『山梨県埋蔵文化財セン ター調査報告書』第81集

仁科義男 1935「山梨県出土の石器時代土偶」『考古学雑誌』第23巻第20号

野崎 進 2002『西原遺跡・柳原遺跡 (2次)』『境川村埋蔵文化財調査報告書』第17集

野代幸和他 1997 『酒呑場遺跡(第1・2次遺構編)』 『山 梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第135集

野中完一 1904「巻末図の説明」『東京人類学雑誌』第19 巻第215号

畑 大介 1983『釈迦堂遺跡周辺分布調査報告書』

藤森栄一 1968「原始時代」『下諏訪町史』上巻

船窪 久 1930「山梨県北巨摩郡発見の土偶」『史蹟名勝 天然記念物』第5集第8号

武藤 盈 1962「山梨県小淵沢岩久保発見の土器」『信濃』 第14巻第3号

村石真澄 1994『上の平遺跡第6次調査・東山北遺跡第4 次調査・銚子塚古墳南東部試掘』『山梨県埋蔵文化財センター調査報告』第94集

望月和幸他 1999『速報・縄文のムラ』

同他 2004『桂野遺跡』旧御坂町教育委員会

山路恭之助他 1987『津金御所前遺跡』『須玉町埋蔵文化 財報告』第4集

山下大輔他 2001『長田口遺跡』『櫛形町文化財調査報告』 第18集

山梨県立考古博物館 2004『縄文の女神』

山本寿々雄 1971『富沢町の先史文化』

山本茂樹他 1996『甲ツ原遺跡Ⅱ』『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第114集

吉本洋子・渡辺 誠 1994「人面・土偶装飾付土器の基礎 的研究|『日本考古学』第1号

同·同 1999「同追補」『日本考古学』第8号

同·同 2005「同追補2」『日本考古学』第19号

渡辺 誠 1995「人面装飾付の釣手土器」『比較神話学の 展望』

同 1998「人面装飾付注口土器と関連する土器群に ついて|『七社宮』福島県浪江町教育委員会

同 2004「縄文の女神-人面·土偶装飾付土器にみ る縄文人の精神世界-」『縄文の女神』山梨県立考古博 物館

#### 追補

表 2中に次の漏れあり。だだし、表  $1\cdot 3$  には変更なし。 新番号55と56の間に、旧番号180の北杜市(旧大泉村) 金生遺跡の 1( $\blacksquare B$ 、曽谷式)、2( $\blacksquare C$ 、曽谷~安行  $\Box$ 式)がはいる。

# 環礫方形配石遺構の復元について

## ー塩瀬下原遺跡敷石住居からー

末 木 健

#### はじめに

- 1 塩瀬下原遺跡の環礫方形配石遺構
- 2 環礫方形配石遺構の観察

- 3 周礫帯の復元
- 4 まとめ

#### はじめに

本論は、山梨県大月市梁川町塩瀬955番地他にある、塩瀬下原遺跡(山梨県教育委員会 2001)から発見された大型の敷石住居跡(1号敷石住居)に伴うとされる「環礫方形配石遺構」について、その性格を探るとともに、鈴木保彦氏(鈴木保彦 1976)や山本暉久氏(山本暉久 1985)、金井安子氏(金井安子 1984)らが「環礫方形配石遺構」「周礫を有する住居址」に与えた旧来の意味付けを、再考しようとするものである。

最初に塩瀬下原遺跡の報告内容を示して、報告者の示した判断の軌跡を述べ、次に、塩瀬下原遺跡の敷石住居の上層の配石と環礫方形配石遺構、その下の敷石住居の関係を、他の報告事例の検討をもとに再確認しておきたい。これは、先の重層的な遺構がそれぞれに時間差を持った遺構なのか、同一時期に存在し同時に廃棄されたものかを確認するためである。

また、塩瀬下原遺跡の敷石住居は縄文時代後期・堀之内式期の年代が与えられている。この年代は金井安子氏が「縄文時代の周礫を有する住居址について」(金井 1984)で採りあげた中期終末から後期初頭の遺構群と、鈴木・山本両氏が採りあげた後期加曽利B期の接点に位置するものであり、金井氏が予想したとおり「周礫を有する住居址」と「環礫方形配石遺構」は時間に添った一連の遺構の可能性がある。

なお、鈴木保彦氏や山本暉久氏による「環礫方形配石遺構」に対する観察・認識・評価が、両氏の論文発表以降、20~30年間も「環礫方形配石遺構」の観察に大きな影響を与えている訳で、新たに発見された同様の遺構については、両氏の論をほばなぞるような観察・評価が安易に行われている危険性を危惧し、ここでは、旧来の鈴木、山本両氏と金井氏の見解を比較検討し、新たに上層配石・環礫方形配石遺構・(敷石)住居を立体的な角度から検討することで、使用当時の遺構の復元を示したい。この復元を、祭祀に伴った遺構と考えられてきた「環礫方形配石遺構」の見方を変えるべき提案としたい。

#### 1 塩瀬下原遺跡の環礫方形配石遺構

1) **塩瀬遺跡1号敷石住居の観察(第1・2図)** 報告書では次の様に記されている。

「環礫方形配石遺構について

環礫方形配石遺構は、居住部奥壁側の敷石の間にコの字型に配置された小礫の帯である。ここでは、東・南・西の順に記述していく。まず、環礫方形配石遺構東側は、長さ約2m、幅0.35cm、厚さ0.1m程の帯である。周辺の敷石より約7cm落ち込んでいる。また、上層の礫群との差は20cmほどある。遺物は、石器2点・土器片が出土している。石器は磨石と石棒の破片である。

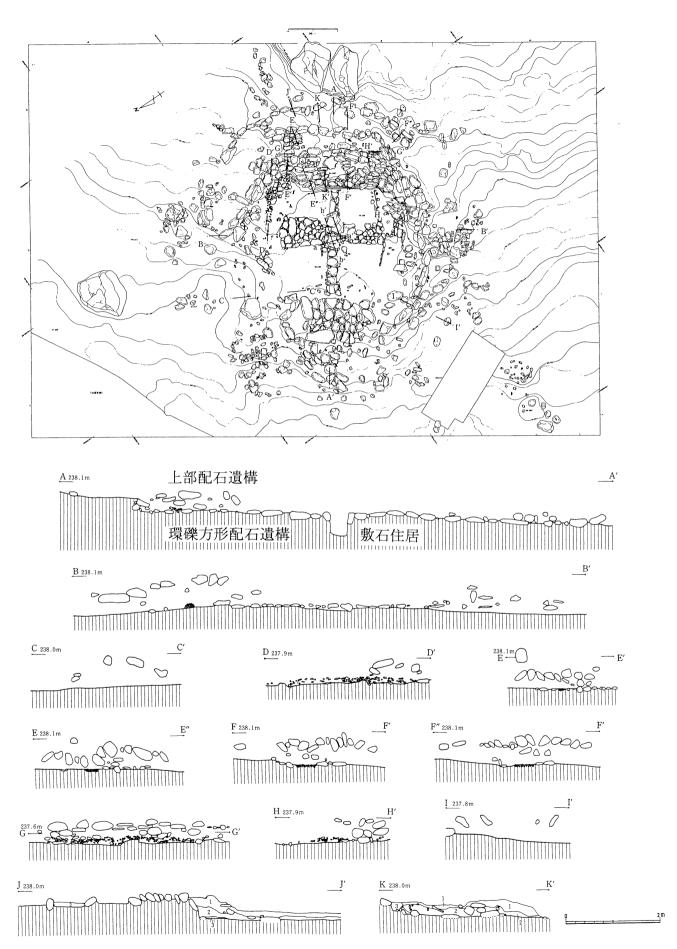
環礫方形配石遺構南側では、長さ約3.7m、幅0.2~0.4m、厚さ0.1m程の帯である。周囲の敷石より約7cm落ち込んでいる。遺物は、石器7点、土器片3点、炭化材1点が出土している。石器は4点が磨石で、中央より西側から磨製石斧の破片が出土している。また、その近くで瑪瑙製の玉が三分の一程度の破片で出土した。小礫をはずしていくと、帯のほぼ真ん中には、敷石が1つ残っていた。この敷石は、居住部分の十字型敷石の軸を延長したものと方向を同じにしている。この敷石の周辺には環礫方形配石遺構の小礫よりやや大きめの石で補強され、周囲の敷石と様相が似ている。また、レベルも違和感がない。

環礫方形配石遺構西側では、長さ2.4m、幅0.3~0.5 m・厚さ0.1mほどの帯である。遺物は、磨石が2点、黒曜石の破片が1点、土器が2点出土している。磨石は敷き詰められて小石の上に置くように配置され、その多の遺物は、小石と一緒に敷き詰められている。敷石部分が一部環礫方形配石遺構の下に入り込むようになっている」

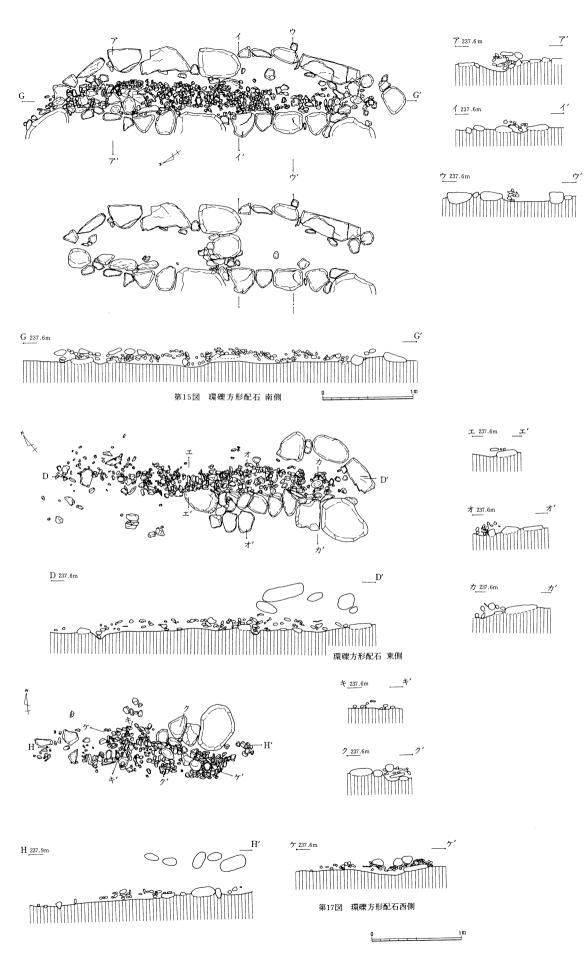
敷石住居の敷石と環礫方形配石遺構の関係について、担 当者は次のようにその構築順序を判断しているので、第3 図により、これも紹介しておく。(第9図も参照)

まず、敷石住居内の敷石を、次のように3区分した。

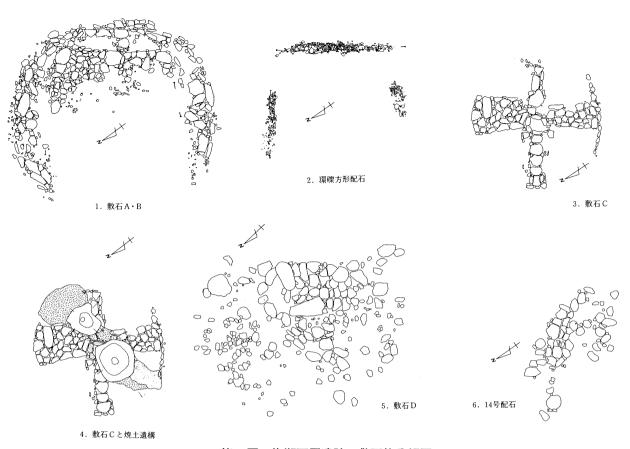
- A 縁石に沿った円形の敷石
- B 環礫方形配石遺構に分断された内側の敷石
- C 十字型の敷石



第1図 塩瀬下原遺跡敷石住居

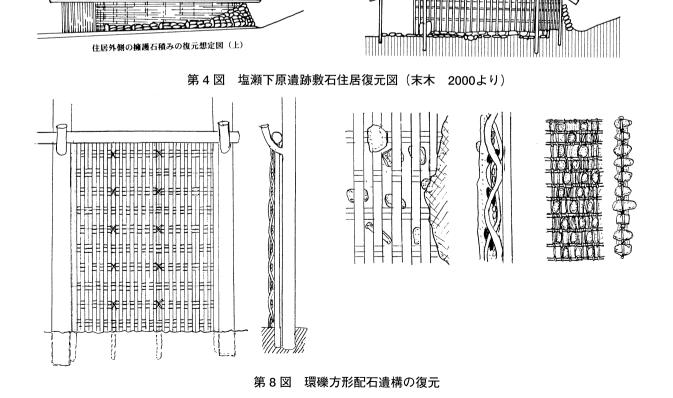


第2図 塩瀬下原遺跡敷石住居 環礫方形配石遺構



第3図 塩瀬下原遺跡 敷石等分解図

住居断面想定図 (下)



- 14 **-**

#### D 柄鏡型住居の柄部分の敷石

つぎに、それぞれの関係を述べている。

①敷石Bと敷石Aは、敷石Bの南東辺に位置する大型の敷石と、敷石Aの縁石との距離が等しく、同一企画で作られたと考えられる。

②敷石B・敷石Aと敷石Cの十字型敷石は、敷石Bと敷石Aの接点となる敷石と、十字型敷石の中心軸が約50cmずれている。

③CとDの主軸はほぼあっているので同一企画で作成されたと考えられる。

④従って、A~Dの敷石は同一企画で作られたもの。

⑤環礫方形配石遺構は、一部敷石に被さるが、敷石Bと敷石Aの間の敷石を剥ぎ取り、その後作られた。

この観察から、「十字の敷石Cと奥壁側の敷石A・Bのどちらが先に作られたかは、今回の検証では明らかにできなかったが、敷石A・Bより環礫方形配石遺構が後に作られたことは間違いない。また、これらの敷石を意識しながら、上層の礫群が作られたことも想定される。したがって、この敷石住居跡は短期間のうちに、何度も立て替えもしくは、増築されて、最終段階の環状列石の様な体裁をもったものと考えられる」として、報告では「検証した遺構は、その1つ1つが、期を同じにしないことが想定される。」とした。

こうした、遺構を別々の時間に造られ、使用されたもの と考えるのは、鈴木・山本両氏の影響が強いものである。

#### 2) 敷石遺構と上層の礫配石の関係

さて、本遺構の上部にある同心円状の配石については、 すでに本敷石住居の外壁を構成する石積遺構が、南側の崖 線の土砂崩落により住居内部へ倒壊したものと説明したこ とがある(第4図)(末木 健 2000)。

同様の遺跡としては、かつて神奈川県青根馬渡1号住居の住居内石積みを参考として示したが、これ以外に塩瀬下原遺跡と類似しているのが、神奈川県愛甲郡清川村宮ヶ瀬の北原(No9)遺跡J4号敷石住居と同遺跡J1号配石遺構との関係である。この二つの遺構は明らかに同一遺構の上屋または壁構造物と、床構造物と考えられるが、報告者はそれぞれ別の遺構と考えたものである(神奈川県立埋蔵文化財センター 1994)。

塩瀬1号敷石住居と類似している点は、

- ① 上部の同心円状配石は地形上の上部に位置する。
- ② 上部配石は敷石住居に覆い被さる様に分布しており、敷石とは間層をもっていること。
- ③ 上部の配石は横口積みにした石が倒壊した状態を呈する。

等の点である。この要素は塩瀬遺跡1号敷石住居で復元した考え方と一致する。

北原遺跡(No9)では、入口部分の敷石(柄鏡住居の 柄部)を意識して、周堤帯に貼りつけられた石積み遺構が、 柄部に通路を形成しながら住居内側に入り込んでいる様子 は、あたかも古墳の前庭部から玄室に入る時の石積み構造 と酷似する。通路を意識した入口部の周堤石積みは、乱雑ではあるが山梨県富士吉田市池之元遺跡1号住居(富士吉田市市史編纂室 1997)などにも見られ、その復元状況は富士吉田市歴史民俗博物館で実見することができる。

なお、住居を取り囲む礫群・周堤礫などを含め、このことについては、石坂茂氏(石坂茂 2004)などによっても特殊な住居に伴う住居構造物として一定の考えが示されており、石井寛氏は周堤礫の観察から「住居外部からの視線が意識された施設」とし、特別な住居であることを述べている(石井寛 1996)。

この様に上部の配石が、敷石住居と一体の立体的な構造物であるとなれば、当然、敷石住居と環礫方形配石遺構は同一時期の遺構を形成する構造物であることになる。なぜなら、同一時期の「上部配石遺構」と「敷石住居」の構造物に挟まれているのが、今回の問題としている「環礫方形配石遺構」だからである。

#### 2 環礫方形配石遺構の観察

#### 1)旧来の観察

塩瀬下原遺跡1号住居の環礫方形配石遺構は、報告者が述べているように、敷石Aと敷石Bの間にあり、しかも敷石の無い部分は、敷石面よりも7cmも下に礫が並んでいる。このことは、敷石と環礫方形配石遺構を同時のものと考えると、敷石を敷くときには初めから環礫方形配石遺構の場所にはほとんど敷石を設置しなかったことになる。一部の敷石が礫帯の下にあったのは、何か別の理由があるのだろう

確かに作業上の前後関係から言えば、敷石の設置が環礫 方形配石遺構に先行することは明らかである。だが、敷石 住居と一体の上部の配石によって覆われている環礫方形配 石遺構は、三者が一体のものと理解しないと、サンドイッ チの上下のパンとハムやサラダを別々に食べるような、不 自然な理解が生じるのである。

環礫方形配石遺構と敷石住居・竪穴住居は同時存在ではなく、環礫方形配石遺構が後から作られた祭祀遺構としたのは、鈴木保彦氏である。また、山本暉久氏も環礫方形配石遺構は住居廃絶に伴って造られたと述べており、その前年に金井安子氏も中期後半から後期初頭の「周礫を有する住居址」について同様の考えを述べているので、順次これらを紹介しておく。

#### ○ 鈴木保彦

#### a 環礫方形配石遺構の形態

方形にめぐる小礫列と遺構の中心に設置される火焚場、 およびその一方から外側に伸びる張出部によって構成される。

次の形態に分類される。

A型 火焚き場は石囲いではなく、張出部がピットに よるもの

B型 張出部が敷石のもの

B 1型 火焚き場が石囲いで、そこから長く続く張出部

が細長い石敷きによるもの。

- B 2 型 火焚き場は石囲いではなく、柄鏡型の張出部が 敷石となるもの。
- B3型 火焚き場が石囲いで、柄鏡型に張出部も敷石と なるもの

#### b 環礫方形配石遺構の復元

- ・ 柱孔やピット列から方形の施設で、上屋があった可能 性が高い。
- ・ 小礫列は屋内の周囲にめぐっており、小礫は床面に高く盛り上げる様に配列していたと思われる。
- ・ 火焚き場は良く使用され、これ以外でも火が焚かれている。
- ・張出部は敷石住居と共通し、入口となる可能性がある。
- c 環礫方形配石遺構の性格
- ・ 環礫方形配石遺構の火焚き場はもちろん内外が焼けて 焼け土が見られる。
- ・環礫方形配石遺構の小礫も焼けている。
- ・ 礫は方形に配置されて焼かれたか、焼かれた石を方形 に配置したか不明。
- ・環礫方形配石遺構からは石棒など特殊な遺物が出土することから、礫帯、火焚き場、張出部は特殊な遺構。
- d 環礫方形配石遺構を取り囲む川原石による配石列について
- ・それぞれ独立した遺構であるが、両者が同一の目的を 持って造られたもので、組石列は明らかに数グループから 十数グループの組石遺構の集合体であり、個々の組石遺構 が意味を持つと同時に、共同社会共通の祭祀の場として、 環礫方形配石遺構を取り囲むように構築されたもの。

#### ○山本暉久

- ・環礫方形配石遺構は基本的に竪穴式
- ・張出部を除くと方形プランを呈しており、後期の住居と 共通している。(平和台遺跡は隅円方形)
- ・柱穴が存在するから、上屋構造を想定できる。柱穴の数 から数回の建直しが考えられる。
- ・鈴木の言う火焚き場は炉と考えられる。
- ・張出部に埋甕を伴うことがあり、まれに加曽利B式段階の埋甕もある。
- ・張出部施設を有するものが多く、この時期の柄鏡形(敷石)住居の張出部と同一である。環礫方形配石を持つか持たないかだけの違いである。
- ・敷石状況は全面敷石を持つ遺構は無い。
- ・環礫方形配石は①方形にプランを囲む様に配石する。② 石は拳大以下の礫を多量に用いる。③礫は火熱をおび、焼土・炭化物の屑とともに検出されている。④火入れはプラン全体に及んでいる。⑤礫帯は上屋が無くなった後、配石されている。⑥環礫方形配石遺構は住居の廃絶に伴う行為・焼けた獣骨片が環礫方形配石遺構やその近辺から出土している。
- ・集落内での在り方は、環状集落の展開の中に、祭祀・墓域・居住といった空間分割があり、環礫方形配石遺構もそ

の中でとらえられるべき。

- ・時期は加曽利BI式期を中心とするが、その初源は中期 終末~後期初頭の柄鏡式敷石住居の中に見られる。
- ・環礫方形配石遺構は「環礫方形配石を有する住居址」と 呼ぶべきで、一般的な住居が廃絶されるときに、環礫方形 配石が行われて、火入れがされた特殊な遺構といえる。
- ・「環礫方形配石遺構」の特殊性は「環礫方形配石」とい う行為に求められるべき。

#### ○ 金井安子

- ・「周礫を有する住居址」は、関東地方、特に多摩丘陵から武蔵野台地にかけて集中している。また、時期は中期終末から後期中葉におよび、中でも加曽利EⅣ式および称名寺式期に属するものが多い。
- ・「周礫を有する住居址」は住居址の壁に沿って環状ない し弧状に礫や土器片、石器などがめぐり、その多くは親指 大から拳大程度の小礫によって構成される。
- ・周礫遺構の出土状況および住居址の柱穴との位置関係は ①礫が柱穴列に重なる形で配されるもの、②礫が柱穴間に 配されるもの、③礫が壁に沿って柱穴の外側や内側に配さ れるもの、に分けられる。
- ・周礫はその住居の存在を意識して礫、土器片や石器を配 するという行為がなされた。
- ・敷石住居の敷石は居住時に行われ、周礫遺構は廃絶され た住居址に対してなされた行為。
- ・周礫遺構は廃絶された住居址の、居住空間を囲繞することにこそ意味があった。
- ・「周礫遺構」と「環礫方形配石遺構」を比較すると、後者の方がより山岳地帯よりの分布を示す。所属時期も前者が中期後半から後期中葉、後者は加曽利BI・II式期に中心がある。しかし、周礫遺構の中には帯状に礫が配される例もあり、焼土の検出や礫に被熱の痕跡がある点は類似。
- ・環状と方形という形状の差は両者の主とする時期からみて、住居址のプランに沿って礫が配された結果であり、両者の間に何らかの系統的関連性を考えることができる。

以上3者の考え方を要約して紹介したが、では、鈴木氏 と山本氏、金井氏の違いは何であろうか。大きくは3つの 点に分かれる。これは次のとおりである。

礫帯や配石、焼土、獣骨などの観察は3者ともに類似しており、おそらく他の研究者による詳細な観察眼によっても、大きく異なることは無いであろう。ただ、鈴木氏が上屋を伴う施設の中におかれた「環礫方形配石遺構」と見るのに対して、山本氏や金井氏は住居の解体後「環礫方形配石」が、または住居廃絶後「周礫の配置」が行われたとするところに、大きな違いがある。3者が柱穴と周礫の関係を明らかにしながら、なぜ、このような結果に達したのか、他の観察結果を導き出せなかったのか、次に検討を進めよう。

	鈴木保彦	山本暉久	金井安子
遺構	環礫方形配石遺 構として構築され、火入れによる祭祀を行った 遺構	住居廃絶後に環 礫方形配石を行 い、火入れを行 った住居	住居廃絶後に居 住域に周礫を行 った住居
時期	加曽利B期を中心	中期終末からの 伝統を受け継 ぎ、加曽利B期 を中心	中期終末から後 期中葉で加曽利 EN式および称 名寺式期のもの が多い。
性格	上屋内部に方形 に礫を配した祭 祀のための施設 で、周囲の配石 遺構とともに祭 祀行為に伴う	住居を廃棄する 時の特殊な祭祀 行為	周礫遺構には、 礫を以てかつて の居住空間を囲 続するという機 能が附されてい た。

# 2) 環礫方形配石遺構・周礫遺構の特徴と柱穴との関係(第5・6図)

環礫方形配石遺構・周礫遺構の特徴には、鈴木氏や山本氏・金井氏が観察したとおり、遺構内部が焼けており、その礫も焼け、獣骨や石棒などの特殊遺物も含まれる等の特徴を持つ。このほか、礫が柱穴を覆うものと柱穴をはずして分布する例があり、礫帯の幅は30~60cm前後で、礫帯の断面は、盛り上げるように配されるという。

鈴木氏は「環礫方形配石遺構」と推定される建築物と周 礫帯の関係を、次の様に推定している。

「どのような形態の上屋であったかは不明であるが、環礫 方形配石遺構が上屋のある方形プランの建築物をもっていたものであるとすれば、小礫列は屋内の周囲にめぐっていたものと考えられる。しかも床面は現在焼土が検出される面や、ピットが確認される面であると推定されるから、小礫は床面に高く盛り上げるようにして配列していたものと思われる」

このような鈴木氏の観察・推論に対して、山本氏は柱穴上に礫が分布することから、廃屋になってから環礫方形配石が設置されたと考えていることはすでに述べた。また、金井安子氏は、中期後半から後期初頭の「周礫を有する住居址」を集成し、柱穴と礫群との関係を①礫が柱欠列に重なる形で配されるもの、②礫が柱穴間に配されるもの、③礫が壁に沿って柱穴の外側や内側に配されるもの、に分類したものの、結論は何故か「廃絶された住居の居住空間を礫で囲繞することに意味があった」としている。

そこで、あらためて環礫方形配石遺構や周礫を有する住 居跡における、礫と柱穴の関係を見てみたい。

鈴木・山本両氏が「柱穴を礫が覆う」としている例には、山本氏が「狭間、なすな原101号、平台北、東正院 1 · 2 号」を挙げているが、鈴木氏は「東正院 1 · 2 号環礫方形配列遺構」は「四隅部と四辺中央部には大形の深いピット

が規則的に並んでおり、しかもこの部分は小礫の配石からはずれていることから柱穴である可能性が高い」としているので、ここでは、平台北遺跡の柄鏡形住居を観察する。

#### 平台北遺跡 (第5地点柄鏡形住居) (第6図1)

礫はいずれも親指大の小礫で、周礫中からは多数の土器と2点の石器が出土している。礫は20~40cmの幅で、床面から2~15cm浮いて、主柱穴を覆うように住居の奥と左右に胴張の「コの字」に配置されている。報告者の戸田哲也氏(戸田哲也 1984)の観察でも、住居と周礫は時間的な差があると報告されている。

しかし、この柄鏡形住居と周礫の分布を観察すると、確かに多くの柱穴の上には礫帯が覆っているが、礫にあまり覆われていない柱穴を見ることもできる。周礫帯と礫の薄い柱穴を結んだ図を作成したが、環礫方形配列遺構は、住居遺構とあまりにも同一企画で造られていることがうかがえる。床面と周礫とに若干の間層が存在するが、報告書での断面では、柱穴縁に接して礫が存在しており、礫の一部は柱穴に流れ込もうとしている様な傾斜がうかがえる。報告書の写真から観察すると、周礫の15cmの高低差は周礫が土堤状に検出された部分のピークと底部の差ではなかろうか。

この様に観察すると、周礫と係わりのある柱穴は、柄鏡 形住居の建物の一部であり、従って、この環礫方形配列遺 構は柄鏡形住居と一体のものとして良いであろう。ちなみ に、炉の左右で周礫帯の内側の床面上には焼土があり、火 災を受けている。

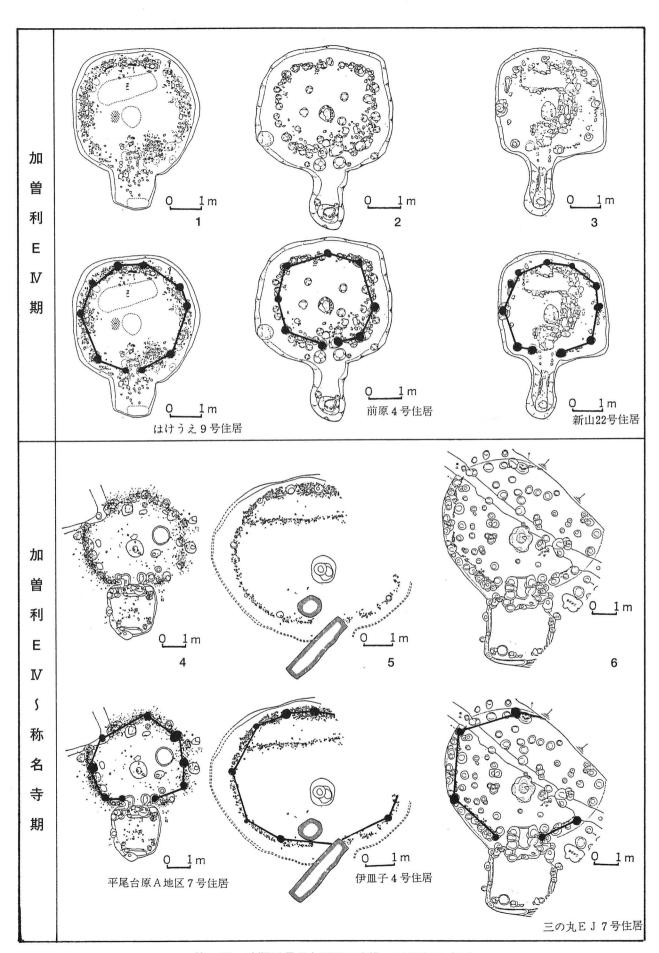
次に、金井安子氏が示した「礫が柱穴列に重なる」遺構は、「平台北遺跡柄鏡形住居、平尾台原遺跡 A 6、A 7、D 4号住居、はけうえ遺跡 9号住居、新山遺跡20・32号住居、査笹塚遺跡 3号」などがある。このうち平台北遺跡はすでに述べたので、次に、はけうえ 9号住居について観察する。

はけうえ9号住居(中津由紀子 他 1980 『はけうえ』国際基督教大学考古学研究センター)(第5図1)

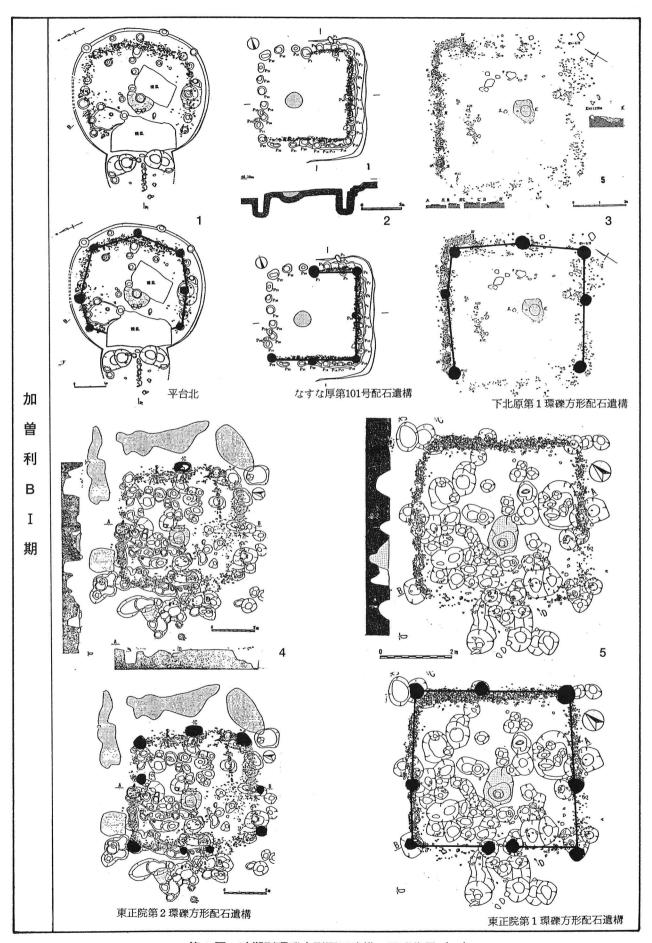
はけうえ9号住居は加曽利EIV式期の柄鏡形住居で、壁の内側に沿って、床面から少し浮いた状態で、柱穴に沿って土堤状の周礫が検出される。周礫は主として川原石で構成され、上部には大形礫、下部には小礫が分布する。中から石皿・石棒・打製石斧破片が出土する。礫は柱穴に沿って分布するようだが、よく観察すると、柱穴を完全に覆っていない箇所があり、これを結ぶと第5図1(下段)の様になる。おそらく土堤状の礫帯が時間の経過とともに、柱穴上にその分布を広げてしまったのではなかろうか。この周礫帯はほぼ円形、あるいは隅丸方形に配置されるが、金井も述べているように、これは中期末の特徴であろう。

この他の遺構についても、詳細な図面の検討は経ていないので、決めつけることはできないが、礫量が多いために 柱穴上に拡散して分布したと推測したい。

さて、このように考えてくると、環礫方形配列遺構や周 礫を有する遺構は、鈴木氏の言うように上屋がある施設と



第5図 時期別環礫方形配石遺構・周礫住居(1)



第6図 時期別環礫方形配石遺構・周礫住居(2)

考えるのが妥当である。

#### 3) 柱穴間に周礫が配される例

金井氏が挙げている中期後半から後期初頭の例では、神奈川県帷子峰遺跡14号住居、東京都前原遺跡4号住居(第5図2)、東京都伊皿子貝塚4号住居(第5図5)、東京都新山遺跡22号住居(第5図3)などがある。

また、山本氏の挙げている後期中葉の遺構で、東京都なすな原遺跡101号配石(第4図2)、神奈川県東正院遺跡第1・2環礫方形配列遺構(第6図4・5)などは明らかに、4隅の柱穴と各辺の中央の柱穴が周礫と重ならない例である。こうした目で見ると、下北原第1環礫方形配列遺構(第6図3)などは、礫の無い箇所に柱穴を想定することができるのではなかろうか。

なお、第5図では中期終末の加曽利EⅣ式期から後期の加曽利B式期の遺構を図示し並べた。ここで注目すべきは、住居のプランであり、周礫のプランもこれに規制されていることが分かる。これは中期終末では8角形を主としていたが、後期では6角形に近い形となり、後期では4角形になっていくことが分かる。塩瀬下原遺跡は6角形から4角形への移行形態を見ることができる。

このように、柱穴と周礫が同時存在の遺構とすると、周礫は床面に高く積まれた土堤状の遺構となり、鈴木保彦氏の想定と一致することになる。しかし、周礫遺構には礫と焼土、土器片や石器・炭化物・獣骨などが伴うことは今までに知られている。すべての例が同じような内容物により構成されているわけではないが、横断面は低い土堤状の断面を持つことは共通しており、礫だけではなく土とともに構成されている。このことは、発掘された状態が縄文時代に造られ、そのまま埋没したという証拠にはならないのではないか、と思う。むしろ、別な状態であったものが廃絶の結果、土堤状の高まりの帯となったのではないかと考えるのが普通ではないか。

また、先に述べたように、環礫方形配石遺構と柱穴の関係は、1つの法則に支えられている。つまり、方形の一辺の礫帯の両端と中央部には、必ず礫の存在しない柱穴があることである。その間の小さい柱穴は礫帯に覆われているのは、むしろ礫帯と同じ構造物を形成した可能性があり、両脇と中央の柱穴はその構造物を支えるための柱穴と考えることができるのではないか。すなわち、建物の中の立体的な構造物として復元を考えると、環礫方形配石遺構は今日に蘇るのではないかと思う。ここが鈴木保彦氏のいう環礫方形配石遺構の理解と異なる点である。

では、次に周礫帯の復元を試みてみたい。

#### 3 周礫帯の復元

#### 1) 周礫帯の観察

今までの見たように、周礫帯は30~60cmの幅を持ち、断面が低い三角またはカマボコ状を呈する。礫は1cm~5・6 cmの大きさが主となり、川原石が多い。また、周礫帯は焼けているものが多く、礫・土器片・石器・土・炭化物な

どで構成されている。中には骨片のあるものもある。

遺構面で焼けているのは環礫方形配石遺構とその内側が多く、外側が焼けていないものが多い。周礫帯外部が焼けていない例は、八王子市狭間遺跡、横浜市平台北遺跡、伊勢原市下谷戸遺跡第1環礫方形配石遺構、東正院第1環礫方形配石遺環礫方形配石遺構(同第2環礫方形配石遺構は逆に外側が焼けている)、山梨県大月市塩瀬下原遺跡などである。

このことは、環礫方形配石遺構が火災の延焼に一定の歯止めをかけた可能性が想定できる。つまり、床面上の施設ではなく竪穴住居内部の空間を仕切る壁・または仕切り物として存在し、火災または腐食によって落下したものという想定が生まれる。これは、塩瀬下原遺跡の観察で「環礫方形配石遺構の小礫を平面的に4~5回に分けて取り上げておいたが、これらの被熱を分析する機会に恵まれたためにお願いした。そして、表面に近い面から標高が下がるに従い、被熱の度合いも減少していくという結果を得た」(報告書より)とあることも重要なヒントとなる。

環礫方形配石遺構が最初からカマボコ状に設置されていたなら、火災の際には表面だけが焼けて、内部は焼けないので、下の礫があまり焼けておらず、上の礫ほど焼けているという上下の差としては観察できない。が、垂直に立てられた構造物が、火災を受けて垂直に崩落したとすれば、上部と下部の被熱差が現れても納得がいくのではなかろうか。しかも、環礫方形配石遺構はいずれも帯状になっていることから、土壁や板壁ではなく、梁などから垂下される幕状のやや柔軟性を持つ構造物であった可能性が高い。

#### 2) 復元の可能性

先に述べたように、環礫方形配石遺構の本来の姿は主柱をつなぐ梁から垂下された構造物であろう。しかも、その構造物は小礫・炭化物のもとになった植物質物質・獣骨・土などとともに構成されていたと考えると、古い日本家屋の壁に類似した薄い壁やカーテン状の簡易な施設が想定できないだろうか。

#### ① 壁・仕切り材の想定

日本の伝統的な土壁は、柱の間に竹・木を縄で組んだ木 舞を編み、この上に、粘性のある土とワラを水で練り込み 発酵させた壁土を投げつけ、木舞となじませてから表面を コテで平に仕上げたものである。

縄文時代の住居にそのような重厚なものが存在したとは 思えないが、より簡略化した壁または仕切り材が存在した ことは想像できる。その根拠は、縄文時代中期以降は全国 各地から植物で編まれたカゴや網、網代、簀(す)、簀子、 編布などが出土しているからである。発掘された網代や網、 カゴ類は、植物性食糧の採取や加工行程に多用されており、 縄文時代のこのような技術は高度なレベルに発達していた と考えても良い。

その例を2.3採りあげる。

#### ・カゴ状製品

鳥取県鳥取市布勢遺跡(財団法人鳥取県教育文化財団

1981)からは2点のカゴが出土しており、このカゴについて渡辺誠、植松なおみ氏の報告がある(渡辺誠他 1981)。この遺跡のカゴは、縄文時代後期に属するもので、第7図1は、まとまって出土したものを広げて計測されており、その大きさは「横幅36.8cm、縦幅16.7cmで、残存する縁巻きの長さは約47cm、もじり編みは7段確認されている。(中略)材の太さは、細い部分で約1.0cm、太い部分で約2.5cm、平均は1.5~2.0cm程度」と観察され、「各条の間隔は左右両端の各条が整然と平行して残っている部分で測ると1.5~1.9cmである」という。また、その材質は、嶋倉已三郎氏によって報告書に記載され、芯も巻き材も「ヒノキ」の細割材の鑑定結果がある。なお、この遺跡からはこの他にカゴ1点と編み物1点の破片が出土している。

#### ・</l></l></l></l></l

篠竹やアシなどで粗く編んだムシロ状の編み物で、福井県鳥浜貝塚から10数例の簀の断片が出土している。この圧痕はスダレ状圧痕などとも呼ばれ、縦糸間隔を $5\,\mathrm{mm}$ 以下に細かく編んだものと、 $1\,\mathrm{cm}$ を超えたものがある。(第7図2)

#### ・簀子(すのこ)状製品

第7図3は、いわき市番匠地遺跡(いわき市教育文化事業団 1989・93)で報告されたものを、渡辺誠氏があらためて詳細な報告を行ったもの(渡辺誠 2005)で、B地点より大形の簀子状製品が出土している。「現存した平面形はヨットの帆形を呈し、長さ約115cm、幅60cmである。上流側には太さ20、長さ130センチの丸太が置かれ、簣子状製品の両側には細い丸太が置かれ、コの字状を呈している。また、これを補強して、裏面に径2cmほどの棒材を置き、数カ所で葦材と棒材を紐状の植物で結んでいる。材はヨシと見られ、密なタテ方向にたいしヨコは約10cm間隔で網代編されている|状態で出土した。

同様の例が栃木県鹿沼市明神前遺跡(鹿沼市教育委員会2003)の水さらし場から出土している(第7図6)。これは、約2m四方の丸太半割材と板材で囲った施設の中央にある、一辺130cm深さ10cmの彫り込みの底部に、敷かれていた「網代」で、東西80cm、南北100cmの範囲で発見されている。

このほか網や編布などがあるが、これからも縄文時代の 技術の高さを知ることができる。なお、発見された遺物の 状態だけが用途を示しているのではなく、このような技術 によれば住居の様々な施設を造ることができるという証拠 にもなる。特に、番匠地遺跡の簀子は十分に住宅の仕切り や簡易な壁として使用することは可能である。

#### ② 壁・間仕切りの構造

以上、見てきたように、縄文時代中期から後期にかけてカゴや簀、簀子状の製品や施設が作られていた可能性が明らかになったといって良い。この様な技術は前期からも発達していたものと思われるが、ここで問題としている後期の住居内部の間仕切りや壁に利用されていたかどうかは、大胆に推論を述べるしかない。

第5・6図でも観察したように、仕切り施設は方形住居の場合は四隅に柱穴があり、各辺の中央にやはり柱穴があることから、各辺に仕切りボードが2枚ずつ設置されたと考えられる。そのパネルは柱と主柱を結ぶ梁を使い、簀子状の編物または簀、網代、網などをセットし、これを補強するために小礫や土器、獣骨、土などを貼りつけたものと思われる。

第8図はこれを想定復元したものである。柱穴間は棒で補強された網代や簀のパネルが建てられ、このパネルを補強するために石や土器片を網代に挟み込み、さらにこの上に薄く土を塗ったかもしれない。このほか草や小枝を挟み、装飾的な効果や呪術的な文様を描いていた可能性もある。塩瀬下原遺跡の環礫方形配石遺構を構成する小礫が、1cm~6cmほどの細長い形態をしているのは、簀子やザルなどの隙間に挟み込み易い形状をしたものが選ばれたのであろう。また、こうした礫や土器などは、文様的効果の他に表面に貼る粘土の剥落を防ぐこともあった。

これらのパネルは柄鏡形住居の居住中心部を取り囲み、主柱の外側の空間と分けていたのであろう。主柱の外側の空間は、さらに竪穴の立ち上がり部分と、周堤帯を含む空間に分けられ、住居空間が2重3重の構造になっていたと思われる。この空間がどのような役割を果たしたのか明らかではないが、前述したように平台北遺跡や東正院遺跡などの住居内焼土の分布などからも想定される。

なお、周礫帯は必ずしも全体を囲うものではなく、住居 内部では一部が囲われていた遺構も多い。一部の遺構と全 体を囲む遺構とは、時間的な差があるのか、使用上、また は祭祀上の儀式の差によるかは今後の検討課題であろう。

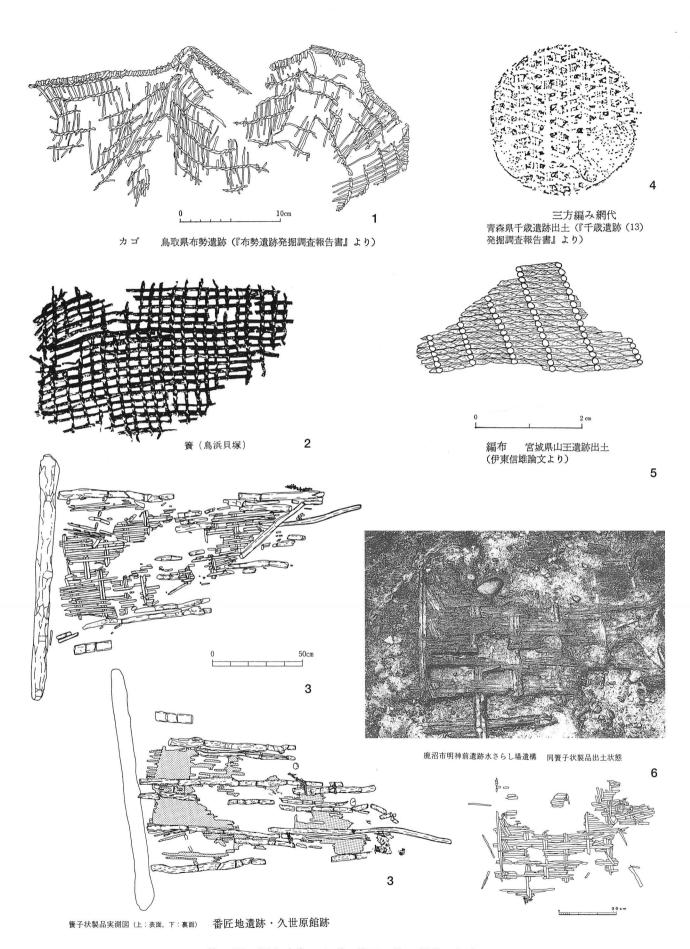
#### ③ 塩瀬下原遺跡の復元

塩瀬下原遺跡の敷石住居には、柱穴が検出されていないが、報告者の笠原みゆき氏が観察したように、住居の奥の南側敷石端は、大形の敷石が約1.7m間隔に3個配されており、その直線に沿った南側に周礫帯が存在する。(第9図)

これは、特異な例かもしれないが、礎石建の建物を想定すると、なすな原遺跡101号配石遺構や東正院 1 · 2 環礫方形配石遺構ときわめて類似した施設と理解することができよう。ただし、堀之内式期の住居であるから、方形ではなく 6 角形となる可能性が周礫帯の形から考えられるので、両サイドは少し開き、小さな礎石が利用されている様である。

十字形の敷石を囲う環礫方形配石遺構は、前述したような居住空間の中心部であり、その周りを壁・仕切り材のパネルにより仕切られたために、火災・放火・廃棄後に礫が落下し、直下のこの場所に形成されたのである。

なお、この時期の礎石立ち建物の存在や類例については、山梨県北杜市須玉町上ノ原遺跡(上ノ原遺跡発掘調査団 1999) C -53号住居跡(堀之内 I 式期)、同 C -83号住居跡(称名寺式期)、C - 8 号掘立遺構(曽利 V ~堀之内 I 式期)などの柱穴の底に礎石が置かれている例があるが、



第7図 縄文時代のカゴ、簀子、簀、網代、編布

敷石住居の例としては今後の研究課題である。

#### 3) 壁・仕切り材の民族例

国内の弥生時代以降の遺跡でも、床に敷いた網代などの例は存在するが、ここでは、中国の例を若干紹介したい (浅川滋雄 1994)。

#### ① 成都十二橋遺跡

四川省の成都から発見されたこの遺跡は、殷代早期の遺跡で多数の建築遺構が部材とともに発見されている。特に壁材は浅川氏により次のように説明されている。

「直径 6~11センチメートルの丸太を縦横に組み合わせて 木舞とし、小さな丸竹と割竹で編んだアンペラ状の壁材を それに取り付ける。

#### ② 関廟山遺跡

揚子江中流域の大渓文化(前4500~3000)に属するこの 遺跡の家屋址F22遺構からは、次の様な壁が発見されている。

「壁の基礎は、まず溝状の穴を掘り、泥土と赤焼土を混ぜて埋め、搗きかためる。地業内部では、細かい柱穴が多数みつかり、東側に倒壊した外壁には竹の圧痕がのこっていた。(中略)壁は、赤焼土・泥土に少量の稲藁・稲籾を混ぜている。すなわち、この家屋は、木柱・竹柱と竹の桟によるフレームを持つ「木骨泥墻(もっこつでいしょう)」壁構造に復元できる。」(註1)

#### ③ 元謀大燉子遺跡

雲貴高原の金砂江南岸の盆地に位置するこの遺跡は新石器時代(前1260年±90年)に属し、前揚の漢廟山遺跡と類似した壁構造をもつ。

これらの遺跡などを浅川滋雄氏は分類し、分布や比較をしている。まず、氏は住居を0型からⅣ型に分けているが、この中でⅠ型・Ⅱ型の壁構造に興味があるので、これを引用する。

「《 I 型》高床式の建物。上部荷重は柱で承け(柱立ち)、 壁は荷重と無関係なカーテンウォールで、木舞壁もしくは アンペラ壁とする。 I 型の発掘例はあまり多くない。ただ し、年代は深く、揚子江下流域の河姆渡遺跡・羅家角は前 5000年頃、馬家浜文化の香草河は前4000年頃、広東の茅崗 遺跡は前2700年頃までさかのぼる。

《Ⅱ型》土間式の建物で、柱立ち。 I 型と同じく壁は荷重 支持とは無縁で、木舞壁もしくはアンペラ壁のカーテンウ ォールとする。揚子江流域から東南地域にかけて分布し、 I 型の大部分とかなり重なりあっている。」

このような事例では、アンペラや木舞に石や土器を挟む例はないが、日本での環礫方形配石遺構を見ると、やはり柱立ち建物で、壁・仕切りは荷重支持とは無関係である。また、完全に一周している例は少なく、部分によっても小礫の量が異なることから、アンペラや木舞に挟み込む場合には特別な約束事があり、文様を描くとか、集団の年間行事を記したカレンダーの役目や、狩場の地図、狩猟の成果を記録する等の備忘録として、小礫や焼骨などが機能していたのではなかろうか。

#### 4 まとめ

「環礫方形配石遺構」と呼ばれてきた小礫が住居内部に めぐる遺構は、長い間下部の住居と別の遺構で、住居の廃 絶に伴って築造されたとか、あるいは廃棄の祭祀行為のた めに造られた遺構とされ、住居とは別の遺構と見なされて きた。

しかし、鈴木氏や山本氏、金井氏が観察したことを、前述の様に別な角度から検討すると、住居建物と一体の施設で建物内部の構造物であった可能性が指摘できる。この施設は、薄い壁や間仕切り施設であったと思われ、廃絶や火災によって梁から落下し、壁や仕切り材に混じった小礫が、その直下に土堤状の周礫帯を形成したと推定できる。(註2)

関東・中部地方の一部に偏る「環礫方形配石遺構」の例は決して多くはないが、関東地方西部において加曽利EIV式期の頃から、類似遺構が見られるようになり、後期中葉の加曽利B式期まで続くもので、このような遺構を住居内部に持つ例は、特異な遺構と考えても良いだろう。しかし、類例の少ないことがただちに祭祀行為の結果として理解しうるかは難しい解釈となろう。

想像を逞しくすれば、居住域を囲う間仕切りの木舞やアンペラに挟み込んだ小礫や焼骨などは、家族や集団の行事を記録するためのカレンダーや備忘録か、あるいはもっと大きな叙事詩のパネルであったかもしれない。このような意味があったとすれば、特殊な敷石住居から環礫方形配石遺構が発見されるのも理解ができることであろう。

本論を著すのに、発掘担当者の笠原みゆき氏には礫の実見に協力をいただき、本センター所長・考古博物館長渡辺誠先生にはカゴや簀子状製品の資料紹介をいただいた。また、文献について閏間俊明氏にご協力いただいた。末筆であるがここに記して、諸氏に深甚なる謝意を表したい。

(H17. 10. 1)

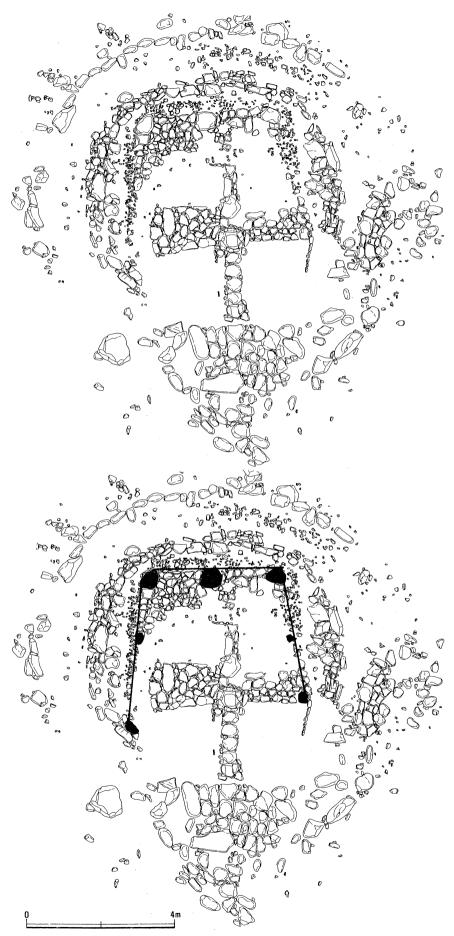
#### 註

- 1 塩瀬下原遺跡の環礫方形配石遺構の下が溝状に窪んでいた事は、この遺構と共通性があるのではないか。
- 2 壁や仕切り材、カーテンなどの素材として縄も考えられよう。縄は「縄のれん」状の連続したものであり、縄の撚りを戻して、この間に石を挟む方法もあるだろう。 1 本に挟む石や骨の位置や数が 1 単位として意味を持ち、数本で1月齢を表すことも可能であり、行事の記録して行われたとすれば、特殊な敷石住居に環礫方形配石遺構が形成された意味もわかる。

### 参考文献

鈴木保彦 1976 「環礫方形配石遺構の研究」『考古学雑誌』62巻1号 日本考古学会

中津由紀子 他 1980 『はけうえ』国際基督教大学考古 学研究センター



第9図 塩瀬下原遺跡敷石住居内の環礫方形配石遺構柱配置

- 渡辺誠・植松なおみ 1981 「布勢遺跡出土のカゴについて」『布勢遺跡発掘調査報告書』(財) 鳥取県教育文化財 団
- (財) 鳥取県教育財団 1981 『布勢遺跡発掘調査報告書』 鳥取県教育文化財団長亜報告書 7
- 金井安子 1984 「縄文時代の周礫を有する住居址について」『青山考古通信』第4号 青山考古学会
- 戸田哲也 他 1984 『横浜市菅田町平台北遺跡群発掘調 香報告書』玉川文化財研究所
- 山本暉久 1985 「いわゆる「環礫方形配石遺構」の性格 をめぐって|『神奈川考古』第20号 神奈川考古同人会
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1994 『宮ヶ瀬遺跡群 IV 北原(No.9)遺跡(2)北原(No.11) 宮ヶ瀬ダムに 伴う調査』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告21
- 浅川滋雄 1994 『住まいの民族建築学 江南漢族と華南 少数民族の住居論』建築資料研究社
- 石井 寛 1996 「縄文時代中期最終末期以降の集落と住居址ー横浜市港北ニュータウン地域を例に一」『パネルディスカッション「敷石住居の謎に迫る」資料集』神奈川県埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団
- 富士吉田市市史編纂室 1997 「池之元遺跡発掘調査研究 報告書」
- 上ノ原遺跡発掘調査団 1999 『上ノ原遺跡』(財)山梨 文化財研究所
- 山梨県教育委員会 2001 『塩瀬下原遺跡 (第 4 次調査)』 山梨県教育委員会・山梨県土木部
- 末木 健 2000 「縄文時代石積みについて(予察)ー山 梨県塩瀬下原遺跡の敷石住居復元」『山梨県考古学協会 誌』第11号 山梨県考古学協会
- 山梨県教育委員会 2001 『塩瀬下原遺跡 (第4次調査) 桂川流域下水道終末処理場建設に伴う発掘調査報告書』
- 鹿沼市教育委員会 2003 『明神前遺跡』鹿沼市文化財報 告書14
- 石坂 茂 2004 「関東・中部地方の環状列石ー中期から 後期への変容と地域的様相を探る一」『研究紀要22 ー 創立25周年記念論文集ー』財団法人群馬県埋蔵文化財調 査事業団
- 渡辺 誠 2005 「いわき市番匠地遺跡における水さらし 場遺構の検討」『研究紀要』13号 財団法人いわき市教 育文化事業団

#### 追記

縄文時代の例ではないが、埼玉県川越市上組遺跡の古墳時代後期2号住居内から、編み物用錘石の興味ある出土状態が報告されている。方形竪穴住居の西側壁近くで、「西壁と南西側柱穴との間に5cm~15cmほどの細長い礫が並べられていた」とある。この出土状態と遺物の観察から、渡辺誠氏はこの礫に出土状態から「あたかも目盛り板を壁と柱(穴)とにくくりつけて作業を行ったような状態」と見ている。おそらく、使用中の編み物用錘石の紐が腐って切

れたために、直下に落ちたものと考えられよう。これは、 環礫方形配石遺構の礫と廃棄状態が類似しているものと考 えている。なお、このことについては渡辺誠先生よりご教 授を得た。

- \* 渡辺誠 1981 「編み物用錘具としての自然石の研究 名古屋大学文学部研究論集LXXX抜刷
- \* 今泉泰之 1974 『南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・ 花影』埼玉県遺跡発掘調査報告3

•

# 縄文時代の剥片剥離手法

## 一酒呑場遺跡出土黒曜石石核の分析から―

保坂康夫

1. はじめに

3. 石核の観察記載

5. まとめと展望

2. 資料の由来

4. 剥片剥離手法の復原

#### 1. はじめに

縄文時代の剥片剥離手法については、田中英司氏(田中 1977)、山田昌久氏(山田1985)、大工原豊氏(大工原1996)、 町田勝則氏(町田1996)、竹広文明氏(竹広2003)などの 研究や提言がある。しかし、中部山岳地域の黒曜石の剥片 剥離について分析したものは少ない。近年、黒曜石原産地 の調査研究が進んでおり、原産地における黒曜石原石の剥 片剥離の状況が究明されつつある(長門町教育委員会・鷹 山遺跡群調査団2000)。しかし、原石の消費地ともいうべ き一般集落での実態は言及されることが少ない。これは、 集落遺跡で、剥片剥離工程を復元できるような接合資料に 恵まれないのが原因と思われる。黒曜石はそもそも接合資 料探索の前提となる母岩分類がむずかしいといわれている が、剥片をトレース台の上に並べて透過光で観察すること で、母岩分類が比較的容易な石材である。こうした方法で 縄文時代の剥片の母岩分類や接合を試みたことがあるが (保坂1990など)、1母岩の構成点数が2~3点と少なくな ることから、ひとつの原石に対する剥離数が非常に僅少で あったのが実態であり、接合資料を得ることそのものが非 常に困難な対象と思われた。黒曜石の剥片剥離手法復元は、 石核や剥片そのものの分析からあえて類推して行かないと 進まないというのが実情であろう。

そこでその手がかりとすべく、酒呑場遺跡の黒曜石石核を中心とする資料を分析したい。酒呑場遺跡は、北杜市長坂町にある縄文時代集落で山梨県埋蔵文化財センターや長坂町教育委員会が1994~2001年にかけて発掘調査した。縄文時代前期後半の諸磯式期から集落が形成されはじめ、中期末の曽利式期まで継続的に住居の構築がみられる。集落は諸磯式期、五領ヶ台式期~井戸尻式期、曽利式期の3段階で占拠地を変えており、調査された住居跡は総数239軒に達する。報告書はすでに刊行されているが(山梨県教育委員会・山梨県農務部1997ほか)、黒曜石石核については未報告であった。

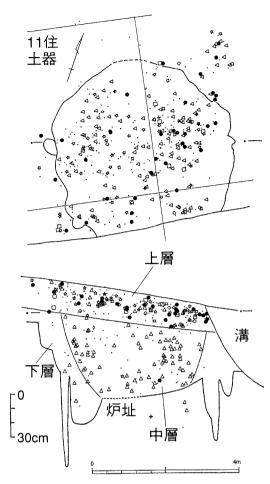
ここではまず前期後半の諸磯式期の資料を分析するが、 諸磯式期は酒呑場集落の起点の時期であり、県内の特に甲 府盆地周辺の縄文時代遺跡の中でも遺跡数の増加する時期である。特に諸磯 b 2 式段階からの住居跡の増加が著しく、各地に集落を形成し、北杜市天神遺跡や笛吹市花鳥山遺跡などのように、大型集落も形成されるようになる。この地域で開花する縄文中期文化形成の起点とも考えられる。そうした位置付けのできる諸磯式期の剥片剥離のありかたをまず観察し、それをスタンダードとして、五領ヶ台式期から曽利式期までの展開についても見通してみたい。

#### 2. 資料の由来

今回黒曜石製石核の実測図を提示するのは、酒呑場遺跡 I 区の11号住居跡出土品である。11号住居跡の大型土器片は諸磯 b 式期で、浮線文を多用するものが主体を占め、爪形文を多用するものが若干含まれることから、諸磯 b 2 式を中心に諸磯 b 1 式から諸磯 b 3 式までの範囲と思われる。大形土器片の示す時期幅は限定されるものの、縄文時代の住居跡出土遺物は覆土中出土が中心であり、他の時期の遺物と混在することが多いため、特に石器について時期判定が難しい。そこで酒呑場遺跡 I 区では、以下の方法で遺物の垂直分布を検討することでこの状況を克服した。

発掘調査の段階で、手のひらサイズより大きな遺物を光波測距儀とコンピュータによるトータルステーションで位置を記録したが、その他の小形サイズの遺物についても、5 mグリッドを4分割し、2.5 m四方の区画を単位として、表面から10cmごとに遺物をまとめて取り上げる方式をとった。黒曜石製品についても、2.5 m四方の範囲で10cm単位での出土レベルの確認が可能である。

そこで、まず出土位置を記録した遺物から住居跡覆土内の垂直分布の状況を把握した(第1図)。いずれの住居跡でも3層に区分可能である。当該期とそれ以前の土器片のみを含む中層と、当該期以降の土器片が含まれる上層、遺物がほとんど分布しない床面に接する下層である。11号住居跡の場合、下層は住居跡の壁にそって分布し平面でみるとドーナツ状になる。中層は住居跡中央部で床に接しており、中層の最大厚が50cm前後と厚い。上層は東側に傾斜しており、30cm程度の厚さで、曽利式期までの土器片を含む。



遺物分布図の記号凡例

#### 十器

- △諸磯b・c式
- □五領ヶ台式
- 。角押文のある土器(狢沢式)
- ・三角押文のある土器 (新道式)
- 幅広押文のある土器 (藤内式)
- \* 半肉彫文のある土器(井戸尻式)
- \* 曽利式
- · 時期不明

第1図 酒呑場遺跡 | 区11号住居跡の遺物分布図

曽利式期や井戸尻式期の土器片が各1点ずつ、床面近くにあるが、中期の集落形成時期に開けられたピットなどに落ち込んだものと判断される。こうした土器片の分布状況から、石器などの遺物も、土器片の示す時期のものと理解することができる。諸磯b式期は、それ以前には大規模な集落の形成はみられないため、ほぼ純粋にその時期の遺物群と判断される。この他の時期についても中層の把握が可能であり、中層出土品の比較によって石鏃や打製石斧などの時期変化を捉えることができた(保坂2005)。

ただし、その意義付けであるが、この中層遺物群が住居跡の住人の生活期間に係る遺物群であるかは論議があるところであろう。住居跡覆土中出土遺物群は、一括出土土器のように、住居が廃絶された後の窪地に廃棄されたものであるという解釈が一般的である。下層の無遺物層について住居廃絶後、上屋構造を取り去り放置された期間に、住居の壁の崩壊や、風性堆積、降雨による流入などで形成された土層であるとする。しかし、酒呑場集落のように、遺物を多量に含む覆土をもつ住居跡や土坑が密に分布する集落で、他の遺構を壊して構築される住居の覆土に無遺物の層を形成することが可能であったか疑問である。

報告書では、下層の形成と中層の形成とを一体のものとして考えた。それは、屋根を土葺きとするような構造を想定し、廃絶時に柱を抜いて上屋をたたみ、竪穴の中に落ち込ませる状況を考えた。土葺きは木材や木の枝、草等の屋根材の上に葺かれたものと想定されるが、廃絶後に屋根材がフルイの役目をして土壌粒子のみが屋根材と床との間隙に堆積したり、屋根材の中に土だけが入り込むことも考えられる。土葺きの土の中には遺物が入り込むのと同時に生活期間の中で廃棄されたものも鋤き込まれたものと思われる。それが中層となって把握されることになるものと思われる。廃絶後、土葺きの上に遺物が廃棄され、他の時期の遺物と混合する上層を形成したものと思われる。

こうした考え方からすると、住居覆土中出土遺物群の内、 中層のものは当該住居の住人が生活している期間に廃棄し た遺物が遺物群の主体となることになる。

ここでは、まず諸磯 b 式期の11号住居跡の石核を記載し、分類を行う。その後、酒呑場遺跡 I 区の他の住居跡出土石核についても比較検討を行い、時期変化のありようを検討する。資料としたのは諸磯 b 式期では2・18・22号住居跡、五領ヶ台式期では6・30号住居跡、狢沢式期では16・19号住居跡、新道式期では12・29・32号住居跡、藤内式期では5・10・20・33号住居跡、井戸尻式期では3・25・38号住居跡、曽利式期式では13・21号住居跡である。いずれも、遺物垂直分布を検討し、中層出土遺物のみを抽出して資料化した。また、剥片や原石についても言及し、縄文時代の剥片剥離手法の実態について迫りたい。

#### 3. 石核の観察記載

第2図1は板状の石核である。剥片剥離作業面である a面全体は、原石の表面を構成する面の内、最も広い面が 選択されている。2枚の剥離面がd面を打面として剥離さ れている。左側の広い剥離面はa面端部の底面を剥ぎ取り、 剥片はウートラパッセとなったと思われる。右側面も折れ たような剥離であるが、この剥離に連続する剥離面である。 打面であるd面は、自然面のズリ面である。 奥行きのない 横長の打面で、長軸方向の辺の左よりを打撃している。 a 面右端部にd面を打面とする剥離面がかろうじて残存して いる。この打撃部は打面の右端にある。同一打面から2枚 以上の剥片剥離を行ったものと思われる。流紋岩の夾雑物 を多く含む不透明漆黒色の黒曜石である。

第2図2は板状原石を用いた石核で、剥片剥離作業面は a面の1面だけに限定される。ズリ面の横長打面であるd 面の長軸の右側に偏った部分を打撃している。この剥離は b面にまでおよび、石核側辺を折り取るような剥離となっ た。この剥離以前にa面左下方からc面を打面とする打撃 がみられるが、比較的小形の剥片が剥離されており、自然 面の状況からも深く剥離が進んでいないので、まともな剥 片は剥離されなかったものと思われるが、一つの作業面に 対して、打面を変えて多方向から剥片剥離作業を行ってい る。d面を打面とする大きな剥離以前と思われる剥離がa 面右下部に1枚残存している。周囲の自然面の状況から、 d面を打面とするこれらの2枚程度が剥離された枚数と思 われる。黒シマ入りのズリ面をもつ黒曜石である。

第2図3は板状の石核で、表裏両面に剥片剥離作業面がある。a面の剥離は横長の原石ズリ面であるd面を打面とし、横長打面の長辺ほぼ中央部を打撃して、a面のほぼ全体を剥離している。剥片剥離作業面の周囲はすべて自然面であり、剥離が深く進んでいない。

裏面の b 面では、a 面右側の自然面を打面とする剥離と、a 面下側の自然面を打面とする 2 方向の剥離が見られる。まず、a 面右側の自然面の下側を打面とした剥離が行われる。その剥離面を立てて打面を見ると、横長の打面であり、その長辺の片側に偏った部分を打撃している。この剥離の端部側に、同じ打面からの剥離面がかろうじて残存していることから、以前に剥離作業がなされていた可能性がある。

次にb面右側の剥離面が、打面を90度転位してa面下方の自然面を打面として剥離される。打面側に小規模な剥離があり、剥離端部側と段をなしているが、周囲の自然面や剥離面との関係をみると、同一打撃で剥離されたと考えられる。打面は横長の自然面で、その短辺を打撃している。

最後の剥離は、最初の剥離と同じ自然面打面に再び転位 し、横長打面長辺の片側を打撃している。

いずれの剥離でも打点は明確でなく、リップの発達する ものもあり、軟らかい素材のハンマーを用いた可能性があ る。黒シマの入った黒曜石で、自然面はズリ面である。

第2図4は大きな原石を分割したと思われる分割面が、d面とc面上半部にみられる。この石核の大きな特徴は、最後に剥離されたa面右端でb面におよんでいる剥離面である。d面の分割剥離面を打面としている。その面は横長で、長辺の右端部を打撃している。非常に強い力で打撃されたと思われ、石核の端部を剥ぎ取り、剥片はウートラパッセとなっていると思われる。

この剥離以前に同一打面で剥離がなされている。剥離は 石核中央部で止まり、ヒンジフラクチャーとなっている。 同一打面の左端部を打撃してもう一枚剥離がなされるが、 前2者とは違い小規模な剥離である。

これらの剥離面の剥離方向とは反対方向の剥離がみられる。おそらくc面の下方の剥離面を打面としたものと思われる。したがって、a面は複数方向の剥離作業面である。

c面下方の剥離面は2枚の大きな剥離面の端部であり、剥片剥離作業面の存在を推定させる。この面を打面として細かな剥離群がc面からa面下部にかけみられる。打撃点が潰れており、比較的硬い素材に押しつけたような剥離群である。

透明な黒曜石で、自然面は円礫転摩面である。

第2図5は、a面の剥離面の内、d面の自然面を打面とした剥離は、反対面を剥ぎ取るウートラパッセ剥片を生み出したと思われるものである。周囲の自然面の状況から、この剥離以前にはあまり多くの剥離がなされていないものと思われる。a面右下部にはc面を打面とする小規模な剥離がみられ、端部が前記の剥離面を切っている。

a面の裏面のc面でも、d面を打面とした剥離が見られる。この剥離はa面の剥離に端部を切られており、a面の剥離以前に剥離されたと考えられる。また、右側端部が段をなしている。c面左下にはa面を打面とした小規模剥離がみられ、前記の剥離に切られており、さらにa面の小規模剥離にも切られている。c面右下部にも剥離面があるが、風化の進んだ古い剥離面であり、原石段階からみられたものと思われる。転磨による風化自然面を持ち、くず湯状の不透明黒曜石である。

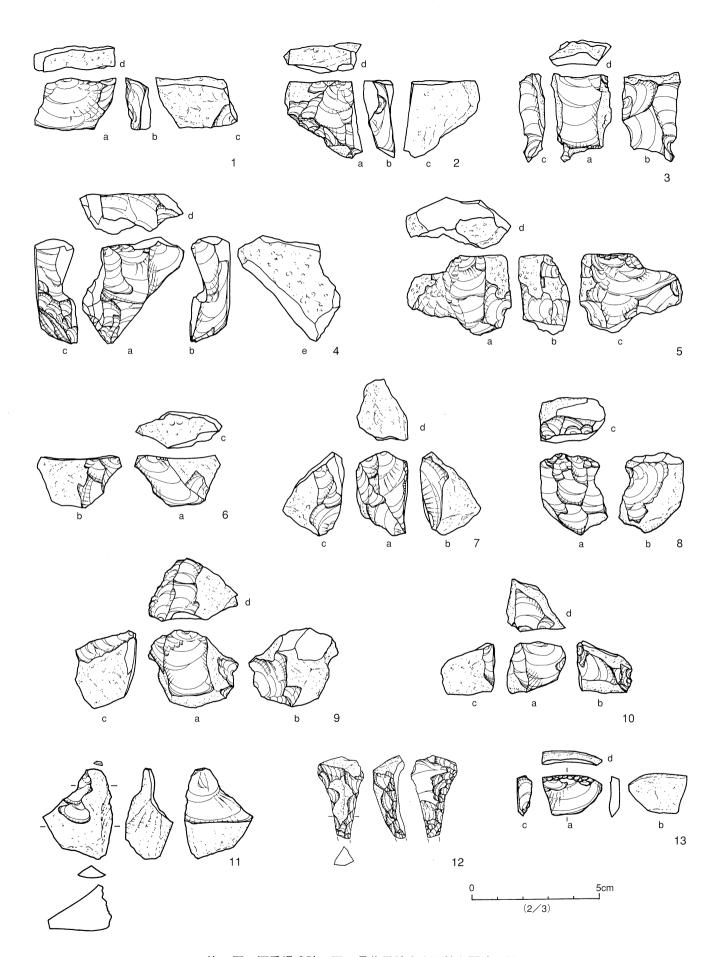
第2図6は、小形の原石の表裏に剥離作業面をもつものである。a面左側では、c面の横長自然面を打面としたウートラパッセ剥片を生み出したであろう剥離がみられる。a面左上方部に自然面が残っており、原石の端部を剥離していることが分かる。a面右下にはb面下部の自然面を打面とした小規模剥離がみられる。

この裏面のb面では、c面の横長打面の端部を打面とした剥離がみられるが、a面の剥離に大きく切り取られている。それ以前の剥離としてb面右端方向からの打撃で、前述の剥離と直行する方向の剥離がなされている。白シマが若干入る透明な黒曜石で、自然面はズリ面である。

第2図7は、これまで記載した石核とは違い、塊状の原石を用い、奥行きのある打面をもっている。a面では上下両方向からの剥離面がみられる。剥離作業面の中央部に自然面が残存し、剥片剥離があまり深く進んでいないものと思われる。一方、b面ではこれらの剥離作業で失われた打面からの大きな剥離の端部が残存している。白シマの入る半透明黒曜石で、ズリ面の自然面である。

第2図8は塊状の原石の3面に剥片剥離作業面が設定されている。最も剥離作業が進んだa面では、同一打面から4枚以上の剥片が剥離されている。最も古い石核下端部の剥離面は両側に自然面があり、背面全体に剥離面をもつ最初の剥離であった可能性がある。a面左側面は全面自然面である。a面の打面であるc面はa面側を打面とする比較的小規模な剥離からなる。また、b面はa面を打面とした1枚の剥離面である。自然面の残存状況から、残存する剥離面以上に石核消費が進んでいる状況は見受けられず、ほぼ原石の大きさの状態である。

第1図9は、塊状の原石を素材としている。a面中央部



第2図 酒呑場遺跡 I 区11号住居跡出土石核と関連石器

の大きな剥離はd面の剥離面を打面としているが、a面左端部の剥離はd面左側の剥離に切られており、a面、d面の各剥離が打面転位しながら剥離された状況が把握できる。いずれの面も自然面の残存状況から、あまり深くは剥離作業が進んでいないものと思われる。b面では自然面を薄く剥ぎ取るように剥離がみられるが、a面下部の自然面を打面として2枚程度が剥離されている。

第1図10は塊状の石核である。a面にd面を打面とする同一方向の剥離が2枚みられる。他の作業面では、微細な剥離を除くと、b面、d面において1枚のみの剥離がみられ、自然面の状況からあまり深くは剥離作業が進んでいなかったものと思われる。白シマの入る半透明の黒曜石で、自然面はズリ面で、7・8・9も同様の黒曜石である。

#### 4. 剥片剥離手法の復原

剥片剥離手法の復元にあたり、まず石核を類型化したい。 形状では板状で横長の奥行きのない打面をもつもの(第 2 図  $1 \sim 6$ ; I 類とする)、塊状で奥行きのある打面をもつもの(第 2 図  $7 \sim 10$ ; II 類とする)とがある。 I 類にはまるで爪のように薄く小形のものがあり(第 2 図 13、諸磯式 b 期の23号住居跡上層出土)、打撃時の特殊な石核保持法の存在が推定される。集計を行う際には、板状は幅が厚さの 2 倍以上のものとした。また、図示はしなかったが長さが幅の 2 倍以上のものを棒状石核(II 類)とした。 11 住中層出土石核は17 点あり、 I 類 12 点である。

次に剥片剥離作業面を類型化すると、1打面からの剥離面のみで構成される単一方向作業面をもつもの(第2図1・3・8~10;a類)、同一作業面を複数の方向から剥離する複数方向作業面をもつもの(第2図2~7;b類)、打面転位があり作業面を複数もつもの(第2図3~10;c類)がある。実際は3者の組み合わせである(第1表)。

第1表で、各時期の類型別の出現状況をみると、形態では塊状のⅡ類が板状のⅠ類に比べやや多い状況で、各時期ともⅠ類が4割前後、Ⅱ類が5割前後あり、Ⅲ類が1割程度あるという状況である。剥片剥離作業面の分類では、a類が8割前後の石核にみられ、b類が4~5割、c類が6~7割程度みられるという状況である。組み合わせ状況では、石核の形態にかかわらず、a類が何面かみられるもの(ac類)、a類とb類が組み合わさるもの(abc類)が最も多く各時期でみられる。b・b c 類の少なさが目立ち、同一作業面を複数方向から剥離する作業面であるb類は、それだけで出現することが比較的少なく、a類と組み合わさって出現することが多い傾向が各時期の状況として言える。

そこで11号住居跡中層出土の剥片62点について、背面構成状況を観察してみた。背面が自然面のみのものが6点で、剥離面をもつものが圧倒的に多い。背面に剥離面をもつものの内、主要剥離面と同一方向の剥離面だけものが25点45%で、複数方向の剥離面をもつもが31点55%と過半数を占めている。石核では同一方向の剥離面である a 類が8割前後に見られる点と矛盾するように思われるが、作業面を

大きく剥ぎ取ってしまうため、剥離の履歴が剥ぎ取られて しまう状況が多いことが推定できる。

なお、複数方向の剥離面をもつものの剥離方向は、主要剥離面と同一方向の剥離面がみられるものが18点58%ある。他の方向では、右方向からが11点36%、左方向からが14点45%、反対方向からが11点36%で、同一方向より少ない。同一方向だけの剥離面を含めると43点77%に同一方向の剥離面がみられる。同一打面で複数回剥離する機会が多かったことを推定させる。2枚以上の剥離で剥片中央部に厚みを持たせたり、剥離面の切り合いによる鋭い刃縁部を確保したものと思われる。

しかし、剥離面のみで構成される背面を持つ剥片は21点34%と約1/3で、背面に自然面をもつものが過半数を占めている。背面の自然面が5割以上の被覆率のものが24点39%で、この内全面自然面のものも6点10%ある。複数回の剥離作業を同一打面の同一作業面で行うことがままあるが、自然面が剥片に残ることが多く、剥離の枚数も限定的であったものと思われる。

ところで剥片の打面は厚みが薄いものが多く、点状打面が8点ある。これを含めて厚さ1mmのものが12点で3mmまでのものが22点で打面の残存する剥片38点の中の過半数を占める。厚さ3mm以内の打面の長さは1cm以内である。剥片の過半数は小さな打面が求められたと思われる。これは、石鏃の素材を意識したものと考えられる。

11号住居跡の石核は、自然面の残存状況からみて、あまり深くは作業が進んだ形跡がなく、1作業面で2~3枚程度の剥片が得られた程度と思われる。そこで、いずれの作業面においても自然面が残存するもののを、あまり深く作業が進んでいない石核として把握し、各時期の状況をてみた。諸磯式期で76%と最も多く、五領ヶ台式期36%、新道式期30%、狢沢式期27%、藤内式期32%、井戸尻式期34%、曽利式期39%という状況である。諸磯式期が他の時期の倍近くを占めている。小形の原石を剥離するため1枚の剥離で一つの面全体が剥離されてしまう状況が多々あり、自然面が残らない作業面が多くなることも考えられる。しかし、特に諸磯式期で、剥片剥離をあまり深く行わずに廃棄する傾向が強いことは認識する必要がある。

剥離面の特徴として、石核底部を剥ぎ取った、ウートラパッセ剥片を生み出したであろう剥離が目をひく。本住居跡中層出土の剥片中にウートラパッセ剥片がみられるが、折れているため、諸磯b式期の23号住居跡中層出土で、黒曜石製ウートラパッセ剥片を図示した(第2図11)。原石の角の部分をねらって打撃したものと思われ、横断面が三角形状を呈する。打面が小さいため、打面側に先端部をもつ石錐の素材となりうる。第2図12(2号住居、諸磯b3式期、上層出土)を石錐の素材としての使用例として提示しておく。

各時期の石核底部を抜くような、ウートラパッセ剥片を 剥離したと思われる剥離面のある石核は、諸磯式期で64%、 五領ヶ台式期で57%、狢沢式期で50%、新道式期で50%、

第1表 酒呑場遺跡 | 区の石核類型

時期	I	II	Ш	la	b	С	Ιa	I ac	I abc	Ιb	I bc	Πa	II ac	II abc	Пь	II bc	Ша	Шас	<b>∐</b> abc	Шb	Шbс
諸磯式期	14	17	3	29	17	26	2	5	5	2	0	2	7	5	2	1	0	1	2	0	0
%	41	50	9	85	50	76	6	15	15	6	0	6	21	15	6	3	0	3	6	0	0
五領ヶ台式期	7	7	0	11	9	9	2	2	2	1	0	0	1	4	2	0	0	0	0	0	0
%	50	50	0	79	64	64	14	14	14	7	0	0	7	29	14	0	0	0	0	0	0
狢沢式期	2	6	2	7	5	5	0	1	0	1	0	1	2	2	1	0	1	0	0	1	0
%	20	60	20	70	50	50	0	10	0	10	0	10	20	20	10	0	10	0	0	10	0
新道式期	9	15	2	24	10	16	4	2	3	0	0	3	5	5	1	1	2	0	0	0	0
%	35	58	8	92	38	62	15	8	12	0	0	12	19	19	4	4	8	0	0	0	0
藤内式期	18	22	4	39	16	31	2	6	7	3	0	5	12	3	2	0	1	2	1	0	0
%	41	50	9	89	36	70	5	14	16	7	0	11	27	7	5	0	2	5	2	0	0
井戸尻式期	12	16	4	27	12	18	7	2	1	2	0	3	7	5	0	1	0	1	1	2	0
%	38	50	13	84	38	56	22	6	3	6	0	9	22	16	0	3	0	3	3	6	0
曽利式期	15	17	1	29	12	23	4	4	4	0	3	5	7	. 4	0	1	1	0	0	0	0
%	45	52	3	<b>l</b> 88	36	70	l 12	12	12	0	9	15	21	12	0	3	3	0	0	0	0

藤内式期で43%、井戸尻式期で34%、曽利式期で39%と、時期を追うごとに漸減している。これは、ウートラパッセ剥片を必要とする石錐が、あまり作られなくなった可能性がある。これと関連して、酒吞場遺跡では石錐の長さが、諸磯式期から五領ヶ台式期で4cm台が最大であったのが、狢沢から藤内式期で3cm台、井戸尻から曽利式期で2cm台と小形化する傾向があり、この石錐の変化に対応している可能性がある。

次に石核の大きさを、長さの数値を用いて検討してみる (第3図)。諸磯式期では3~3.4cmの区間が最も多く、6 cm大のものが最も大きい。五領ヶ台式期から新道式期では2.5~2.9cmの区間が最も多くなり最大は5~5.4cmの区間にある。藤内式期から井戸尻式期にかけては前段階と同様に2.5~2.9cmの区間が最も多いが最大の区間が4.5~4.9cmと縮小化する。曽利式期も最大区間は同じであるが、次に多い2~2.4cmの区間が各時期で漸増し、この段階で最も多い割合を占めるようになる点が注目される。時期を追うごとに、小形の石核の占める割合が大きくなっているとすることができる。なお、長さと幅の関係についても分散グラフを第3図に示しておく。

そこで、原石の長さについても検討したい(第4図)。 把握できた資料数が少ないため、グラフにばらつきがでて しまい、十分な成果とはいえないが、諸磯式期は他の時期 に比べて大きいものが多い傾向はあるものと思われる。以 上の検討結果からして、石核の小形化傾向は、剥離作業が 進んで小さくなるというよりも、原石自体が小さいものが 好まれる傾向があったものと推定される。

#### 5. まとめと展望

旧石器時代の石刃技法などの剥離手法は、剥片剥離作業面において前の剥離でできた剥離面を意図的に剥片に取り込んで一定の形態の剥片を一定の手順を踏んで量産するような手法であるが、今回分析した縄文時代の黒曜石剥離手法はそうしたものではない。石核は長さが2~3cm程度の小形のものが多く、同一剥離作業面では2~3枚の剥片を剥離する程度で、他の作業面に打面転位し、あまり石核を深く剥離作業を進めない。もともとの原石の大きさが小形

であるためと思われ、大きな原石を消費して小形化してゆ く旧石器時代の剥片剥離手法との違いを示すものである。

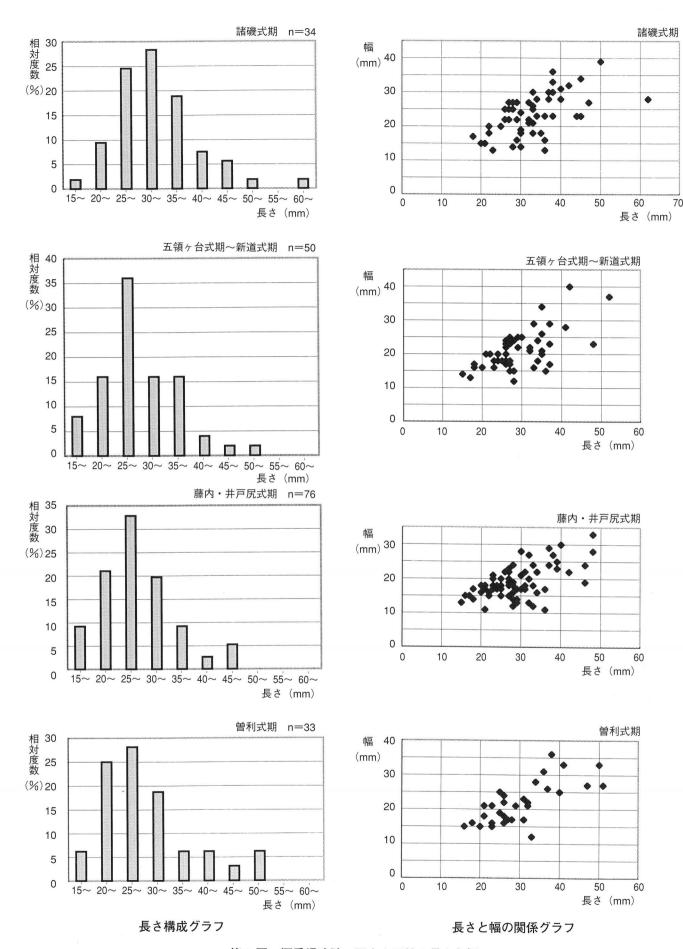
剥片剥離の目的は、石鏃、石錐、楔形石器、使用痕ある剥片などの素材となる剥片の剥離であり、それぞれ目的とする剥片の形態は異なる。使用痕ある剥片は最も多い石器と言えるが、その形状は一定しない。厚みのある縦長剥片をみかけるが、これなど刃部を利用するための剥片と思われる。ただし、自然面があばた状の原石では鋭い縁辺が得られないため、剥離を重ねて前の剥離で得た面と交差する縁辺を刃部として得るか、自然面がズリ面の原石を利用してズリ面と腹面とのなす鋭い縁辺を得たものと思われる。ズリ面は剥離面に近いなめらかな面なので、複数枚の剥離を行わなくとも鋭い縁辺が得られることから、好んで用いられたものと思われる。

一方、石鏃の素材の場合は、比較的薄く、断面が紡錘形で、平面が三角形状の貝殻状剥片が目的剥片となったと思われる。剥片の周囲に厚みがあるものは不向きであり、当然、ウートラパッセ剥片などは石鏃以外の目的で剥離されたものと考えられる。なお、黒曜石製の石匙については、大型の製品があり、ここで示したような石核から剥離された剥片では製作不可能である。大型の剥片を入手して製作したか、製品の状態で入手したものと考えられる。

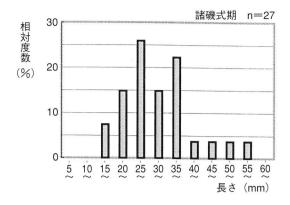
特筆すべきは、石核底部を剥ぎ取るようなウートラパッセ剥片が剥離されている点である。この剥片は、おそらく石錐の素材となったものと思われる。石錐の小形化に対応して、ウートラパッセ剥離の減少や石核の小形化といった傾向も読み取れた。

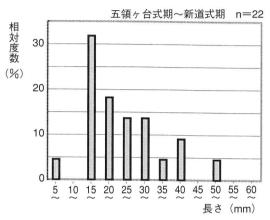
板状石核の存在も注目される。奥行きのない横長の打面で、極端なものは爪のように小形で薄い。これらを剥離するには、打撃時の石核の保持方法を相当工夫しなければならないだろう。ウートラパッセ剥片の剥離も含め、剥離が石核下端に抜けるように、背面と側面の3点を保持して、打撃による衝撃を受け止めたものと思われる。第2図1・2にみられるような折れたような横割れも、側面の強力な緊縛によって発生した可能性がある。これは、小形の原石に適応した剥離手法とみることができる。

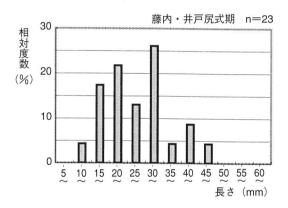
縄文時代の剥片剥離は、得られた素材を加工することに

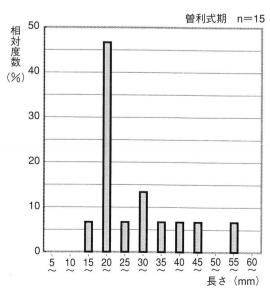


第3図 酒呑場遺跡 | 区出土石核の長さと幅









第4図 酒呑場遺跡 | 区出土の原石の長さ

重点が置かれていたため、旧石器段階のような一定の形態 の剥片剥離はなされなかったとされる。実際、一定の手順 を踏んで剥片を量産する姿は見受けられず、一時に多量に 石器生産するという状況に対応した剥離体系でないものと 思われる。しかし、石錐素材のウートラパッセ剥片や、石 鏃素材を意識して、打面を極力小さくした剥離など、使用 や加工の便を意識したある種の要件をもつ目的剥片がいく つかあり、しかも一つの石核から複数種類を剥離している。 特定の器種が1・2点と臨機的に必要とされるため、その 時に応じて石材をとりだし、必要とする要件を満たす剥片 が剥離できる面を見極め、しっかり固定して1・2枚程度 の剥片を確実に剥離して行く。そうした姿が想定できる。 一時に多量の剥片を剥離して多量の石器をストックすると いうことではなく、補填が必要になった時に少数作り替え る程度のものであった思われる。それだけに、原石も小型 で良かったと思われる。しかし一方で、原石は多量に原石 状態で廃棄されている状況がある。これら原石が剥離でき ないからではなく、一定期間に原石群が交代した可能性も 考えられる。こうした、原石の供給体制も含めて、信州系 黒曜石の剥片剥離体系は理解されねばならないであろう。

#### 引用文献

田中英司氏 1977 「縄文時代における剥片石器の製作に ついて」『埼玉考古』16号

山田昌久氏 1985 「縄文時代における石器研究序説―剥 片剥離技術と剥片石器をめぐって―」『論集 日本原史』) 保坂康夫 1990 「結語」『丘の公園第 5 遺跡』山梨県教 育委員会・山梨県企業局

大工原豊氏 1996 「縄文時代 (2) 石器」『考古学雑誌』 第82巻第2号

町田勝則氏 1996 「石器の研究法―報告文作成に伴う観察・記録法(1)―」『長野県の考古学』(財)長野県埋蔵文化財センター研究論集1

長門町教育委員会·鷹山遺跡群調査団 2000 『鷹山遺跡群IV』

竹広文明氏 2003 『サヌカイトと先史社会』

保坂康夫 2005 「I区の石器」『酒呑場遺跡(第1~3 次) - 酪農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書 (遺物編―本文編―) - 』

酒呑場遺跡の報告書は、山梨県教育委員会・山梨県農務部 1997 『酒呑場遺跡(第1・2次)一酪農試験場増・改 築工事に伴う発掘調査報告書(遺構編)一』山梨県埋蔵 文化財センター調査報告書第135集など7冊刊行された。

## 山梨県出土の畿内系叩き甕に関する覚書

ー甲府市塩部遺跡の調査からー

小 林 健 二

- 1. はじめに
- 2. 塩部遺跡の概要
- 3. 塩部遺跡出土の畿内系叩き甕

- 4. その他の出土例
- 5. 出土の意義と問題点
- 6. おわりに

## 1. はじめに

弥生時代後期~古墳時代前期の土器様相については、その移動の背景一古墳の出現の問題-を中心に、1980年代後半から90年代にかけて非常に活発になった(1)。さらに続く古墳時代中期の土器についても各地の様相が明らかにされた(2)。筆者もこの流れの中で山梨県における古式土師器の成立について追求し、S字甕を中心とした東海系(伊勢湾系)の東日本でのいち早い波及と定着を軸に、北陸・畿内の影響をも踏まえ述べてきた経緯がある(3)。

このような動きも21世紀に入りやや落ち着いた感があるものの、各地で引き続き精力的に続けられている。一方筆者の方は、その後の本県の状況を顧みることなく、不勉強であったことをいささか反省している。そんな中、近年の調査で甲府市の中心部から畿内系の叩き甕がまとまって出土し、興味深い状況が確認されている。それは以前から筆者が気にかけていた問題の一つであり、関東ではこれまでかなり多く出土しているにもかかわらず、本県では出土例がほとんどなかったものである。

小稿では、甲府市塩部遺跡で発掘された資料を取り上げ、 山梨県出土の畿内系叩き甕について考えてみたい。

## 2. 塩部遺跡の概要

塩部遺跡は、現在のJR甲府駅の西約1㎞先に位置し、甲府市中央部を南流する相川によって形成された扇状地の扇端部に立地しており、東西約500m、南北約700mの広範囲に及ぶ遺跡として台帳に登録されている。市街地にある遺跡ということもあり、大小様々な開発に伴う調査が行われているが、この中で大規模な調査としては、1995年に県立甲府工業高校校舎建替工事に伴い山梨県教育委員会が行ったもの(以下甲府工業高校地区)(4)、2001年~2004年にかけて都市計画道路改良工事に伴い甲府市教育委員会が行ったものがある(以下A~D地区)(5)。

甲府工業高校地区では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓11基・溝3条、弥生時代後期の住居跡1軒、奈良・平安時代の住居跡8軒・水路・旧河道跡など

が発掘され、古墳時代前期中葉の方形周溝墓からは最古級 のウマの歯が出土している。

甲府工業高校地区に隣接するA地区においても、方形周 溝墓の続きや同時期の遺構が確認されている。

B地区では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪 穴建物跡20棟、平地建物跡3棟、掘立柱建物跡22棟、溝17 条、古墳時代前期の方形周溝墓2基などが発見されている。 C・D地区では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての 竪穴建物跡23棟、平地建物跡5棟、掘立柱建物跡5棟、方 形周溝墓2基、溝43条などが発見されている。

今回は全体図を用意していないため、各地区の位置関係がわかりにくいが、このように塩部遺跡は甲府市内のこの地域の弥生時代後期から古墳時代にかけての拠点的な集落であったことを窺わせている。また、調査担当者が述べている通り、掘立柱建物跡が多いこともこの遺跡の特徴である。

## 3. 塩部遺跡出土の畿内系叩き甕

本稿で取り上げる畿内系の叩き甕は、C地区の24号溝及び1号方形周溝墓から出土している。

24号溝はこの集落の環濠とみられ、検出された長さは約23.5m、幅約2.4m、深さ約1mで、溝中位には土器や木製品を含む炭化物層(5層)が溝内全面に確認されている。この層は周囲に存在した建物などの「火災処理」に伴うものと考えられており、出土した土器・木製品の多くは2次的に焼けていた。

土器(第 1 図)には壺類( $1\sim10$ )・甕類( $20\sim46$ )・高杯類( $14\cdot16\sim19$ )・器台類(15)・鉢類( $12\cdot13$ )があり、この中で $20\sim32$ が叩き甕である。平底で口縁部は丸く収められ内面はハケ調整である。なお、45は台付甕であるが、脚台部に叩き目が確認できる。共伴資料を見ると、筆者分類 I 類の S 字甕 A 類相当品(35)があり、時期決定の決め手となる。また手焙形土器(11)は、扁平な鉢部は時期的にはやや下る感じがするが、同時期の東海系の影響を受けたものであろう。

木製品 (第2図) は多くが建築部材とみられるが、47・ 48は機織部材であろう。

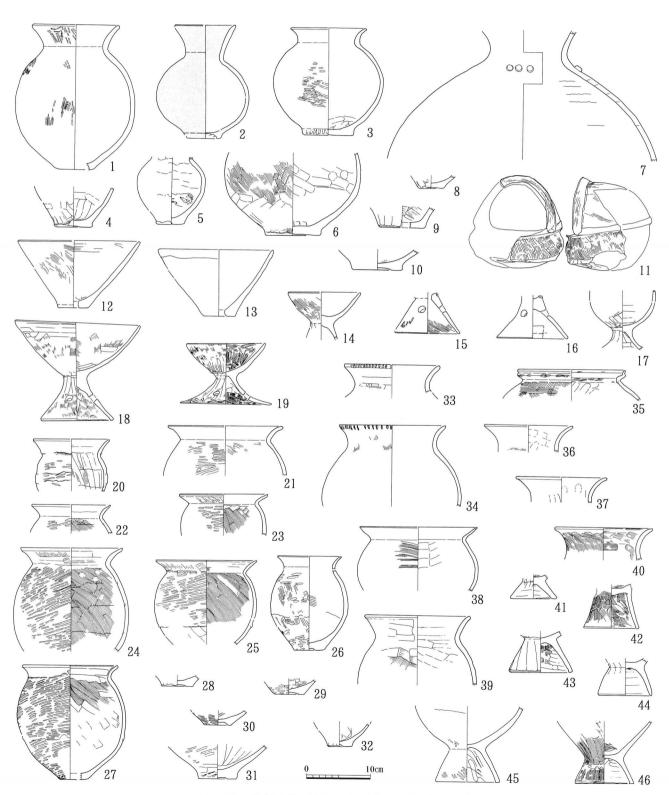
方形周溝墓はC地区では2基発見されているが、1号方 形周溝墓は南北約17m、東西約19mの規模で南西隅のコー ナーに1ヶ所ブリッジをもつタイプである。

出土土器 (第3図) には、甕類 (65~75)、壺類 (63・64)、小型土器 (60~62) がある。このうち65が叩き甕の

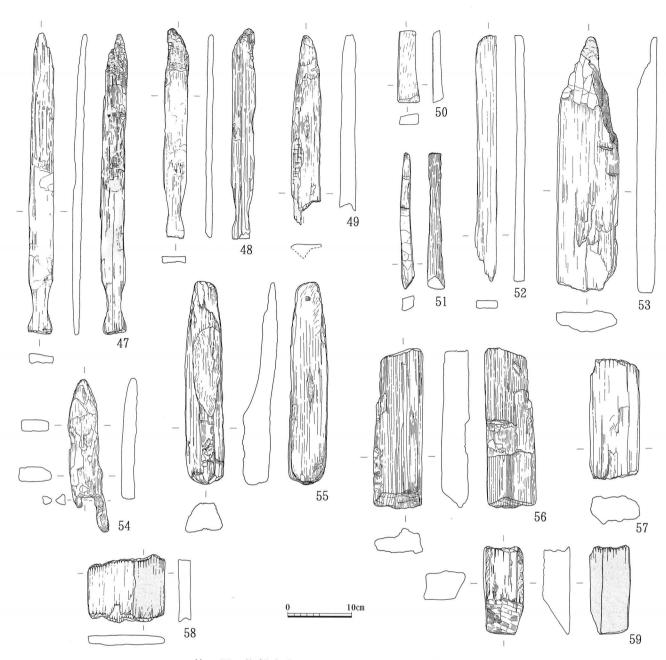
体部下半部で、やはり S 字甕 A 類相当品の脚台部 (75)、 東海系加飾壺 (64) <sup>(6)</sup> が目を引く。

さらに木製品を見てみると(第 4 図)、東海系曲柄鍬 (76) (7) や、鋤の柄の部分と見られるもの((77)) や、孔があけられた板状のもの( $(92\cdot 94)$ 、それに組み合わせて使用できそうな棒状のもの( $(90\cdot 97\sim 104)$ )などがある。

調査担当者が述べている通り、これらの土器や木製品に



第1図 塩部遺跡C地区24号溝出土土器 (1:6)



第2図 塩部遺跡C地区24号溝出土木製品(1:6)

は焼けた痕跡は見られず、方形周溝墓の被葬者や葬送儀礼に関わるような土器・木製品が多数出土していることは大いに注目される。

## 4. その他の出土例

これらの他に県内で確認されている叩き甕は、甲府盆地西部の村前東A遺跡(南アルプス市)(8)で、口縁部から体部上部にかけての破片が1点(第5図105)ある。口縁端部は丸く、体部内面にはナデが確認できる。

さらにそれ以前から知られていた叩き甕といえば、富士山西麓の西一条遺跡(富士河口湖町)(9) で道路工事中に発見されたほぼ完形品(第 5 図106)が知られている。これも塩部遺跡出土のものと同様、口縁端部は丸く平底で、体部上半は粗いハケ、下半はミガキ調整されている。

## 5. 出土の意義と問題点

はじめにも述べたが、塩部遺跡で出土した畿内系叩き甕は、甲府盆地内でまとまって出土した例として初めてのものである。共伴資料から24号溝と1号方形周溝墓の編年的位置を確認してみると、他にも東海系、北陸系が多数出土しており、報告されている通り、筆者編年古墳時代I期(庄内式併行期)である。

また形態的な特徴から、これらはいずれも V 様式系の甕であり、庄内式のものではない。併行関係からも畿内のものではなく、 V 様式系の甕の伝統が残る畿内周辺の地域に系譜を持つものである。これは関東においても同じ状況であることは既に指摘されているところである (10)。胎土分析の結果も搬入品ではないことから、東海系の文物を介してもたらされた技法であろう。であるから、その系譜が分

布状況から既に言われているような西三河・矢作川流域(11)とは限らないと思われる。そして、畿内の影響が実際に現れるのは、筆者編年古墳時代IV期を待たなければならない。しかし、東海系のS字甕、北陸系の甕とともに直接的ではないが、畿内の甕の情報がこの段階で本県にももたらされていたことは大きな意義がある。東海系の影響はもちろん強いものであったが、すべてが東海系ではないこと(12)は各地の状況を見ても明らかである。

一方、1号方形周溝墓から出土した棒状・板状の木製品も重要な意義を持つ。折しも最近、甲斐銚子塚古墳の周溝内から木柱や木製品が多数出土するなど、新たな発見があったところである(13)。両墳墓の造営時期には約1世紀の時間差があり、十分な検証をせず直ちに結びつけることには問題があるが、少なくとも1号方形周溝墓での在り方はその後の葬送儀礼に影響を与えている可能性は高い。

いずれにしても、これらの出来事は甲斐銚子塚古墳が出 現する前段階の、本県の状況の一端を示すものである。

## 6. おわりに

最新の調査結果をもとに、本県の畿内系叩き甕を取り上げ、若干ではあるがその意義を考えてみた。極めて限定された資料であり、依然として出土例の少ないことに変わりはないが、今後系譜や分布について、もう一度整理し直してみる必要がある。

本稿を草するにあたり、塩部遺跡C地区の調査を担当された甲府市教育委員会の佐々木満氏に改めて感謝申しあげます。

### 註

(1) 例えば1993年の日本考古学協会新潟大会『東日本に おける古墳出現過程の再検討』における「新潟シンポ編 年|ほか

- (2) 東国土器研究会 1999『東国土器研究』第5号
- (3) 小林健二 1998 a 「山梨県出土の東海系土器ー波及と 定着と変容ー」『山梨考古学協会誌』第10号 山梨県考 古学協会

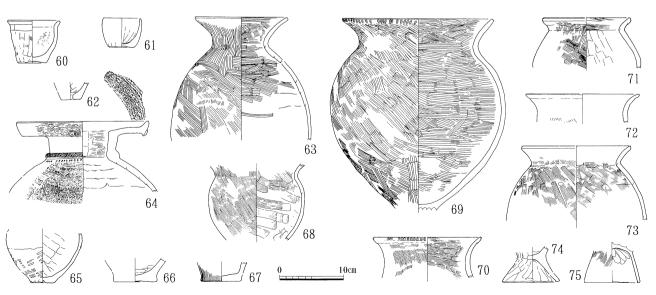
小林健二 1998 b 「甲斐における古式土師器の成立ー3 ・4 世紀の土器編年と墳墓-」『専修考古学』第7号 専修大学考古学会

小林健二 1999 a 「塩山市西田遺跡B区 2 号住居跡出 土土器の再整理」『研究紀要』15 山梨県立考古博物 館・山梨県埋蔵文化財センター

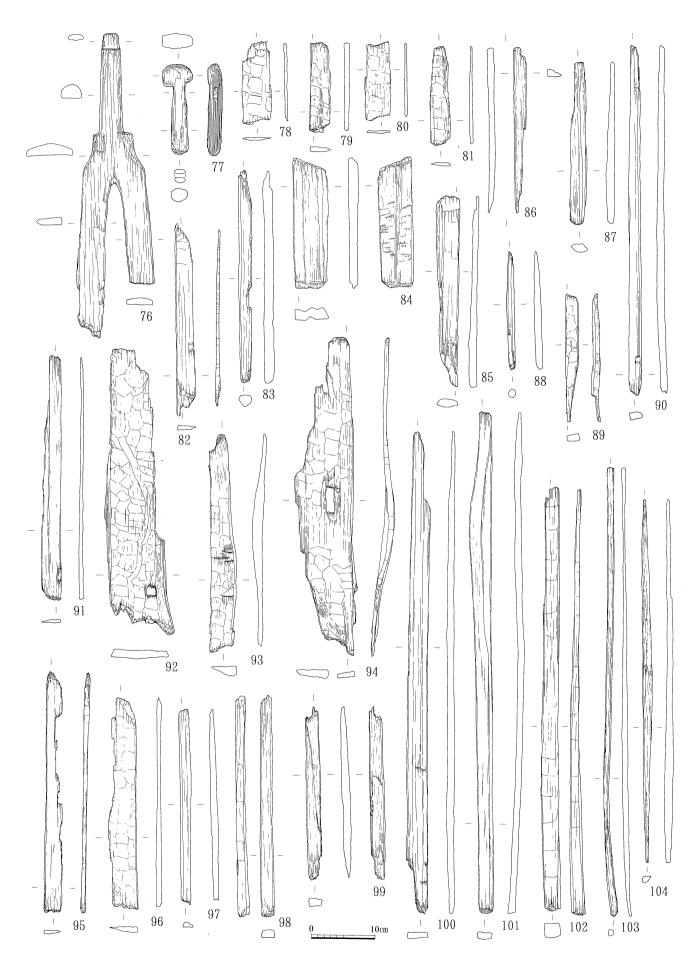
小林健二 1999 b 「山梨県出土の北陸系土器」『山梨 考古学論集』 IV 山梨県考古学協会

小林健二 2000「甲斐のS字甕を考える」『S字甕を 考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局

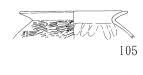
- (4) 村石眞澄 1996『塩部遺跡』山梨県教育委員会
- (5) 佐々木満 2004『塩部遺跡Ⅰ』甲府市教育委員会 佐々木満 2005『塩部遺跡Ⅱ』甲府市教育委員会
- (6) 赤塚次郎 1995「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7 考古学フォーラム
- (7) 樋上昇 1993「木製農耕具研究の一視点ーナスビ形農耕具の出現から消滅まで一」『考古学フォーラム』 3 考古学フォーラム なお、後に樋上氏は東海形曲柄鍬のうち伊勢湾周辺に分布しているものを「伊勢湾型曲柄鍬」と細分しているが、これに従えば「伊勢湾型曲柄二又鍬 I 類」ということになる(樋上昇 2000「東海形曲柄鍬 再論」『考古学フォーラム』12 考古学フォーラム)。
- (8) 三田村美彦 1999『村前東A遺跡』山梨県教育委員会
- (9) 中山誠二 1985「西一条遺跡」『上九一色村誌』上九 一色村誌編纂委員会 なお、この資料は現在山梨県立考 古博物館で寄託を受け保管している。また、西八代郡上 九一色村は平成18年3月1日に北部は甲府市と、南部は 南都留郡富士河口湖町とそれぞれ合併した。
- (10) 比田井克仁 1993「東国における外来土器の展開」



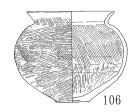
第3回 塩部遺跡C地区1号方形周溝墓出土土器(1:6)



第4図 塩部遺跡C地区1号方形周溝墓出土木製品(1:6 103・104のみ1:12)



10cm



第5図 村前東A遺跡出土叩き甕(105) と 西一条遺跡出土叩き甕(106) (1:6 106は筆者再実測) 『翔古論集』久保哲三先生追悼論文集刊行会 西川修一 1992「関東における畿内系の甕について」 『庄内式土器研究』Ⅱ 庄内式土器研究会

- (11) 早野浩二 1996「弥生時代終末期~古墳時代前期の東海地方における畿内系の甕について」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕そのデザイン』考古学フォーラム
- (12) 赤塚次郎 2005 「廻間Ⅱ式の時代」『東日本における 古墳の出現』東北・関東前方後円墳研究会編
- (13) 森原明廣 2005『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会

## 笛吹市御坂町亀甲塚古墳出土管玉の再整理

石 神 孝 子

- 1 はじめに
- 2 亀甲塚古墳の研究史

- 3 管玉について
- 4 まとめ

## 1 はじめに

筆者は、近年刊行された山梨県史資料編(遺跡編)の中で、「亀甲塚古墳」の記載を担当する機会を得た。これが、筆者が初めて亀甲塚古墳の出土遺物に触れ、あらためて本古墳と向き合うようになったきっかけである。

本古墳は、昭和23(1948)年に主体部の発掘調査が行われ、その時に出土した盤竜鏡と管玉は、現在考古博物館に所蔵されている。盤竜鏡と管玉の実測図は、すでに坂本美夫氏によって作成されており、盤竜鏡は舶載の漢式鏡であること、管玉は53点すべてが細管状の碧玉製で、一方向からの穿孔であると観察結果が述べられている(註1)。

しかし筆者は、管玉の穿孔部を観察するうちに、管玉の穿孔方法が両側穿孔ではないかと疑問を持つようになった。管玉が細く、肉眼観察では限界があると判断し、帝京大学山梨文化財研究所の鈴木稔氏に相談したところ、X線写真撮影の協力を得ることができた(註 2)。今回その撮影結果をもとに、新たに実測図を作成し、ここにその調査結果をまとめるものである。

## 2 亀甲塚古墳の研究史

本題に入る前に、本古墳の研究史について、若干触れておこう。

本古墳は笛吹市(旧東八代郡)御坂町成田に所在し、甲府盆地を北東から南西へ流れる、笛吹川左岸に立地する(第1図)。

前節ですでに述べたように、本古墳は昭和23(1948)年に 当時甲府二高教諭であった中島正行氏によって主体部の発 掘調査が行われ、翌年には調査に携わった学生、村松真琴 氏によってその概略が報告された(註3)。

その後、永峰光一氏は、「甲府盆地における古墳出土鏡の新資料」(註4)で発掘調査時に出土した盤竜鏡に着目し、さらに翌年の「古墳と環境―甲府盆地の場合―」(註5)の中で、本古墳を甲府盆地における「古墳時代の中期を形成する古墳」としてその性格を位置づけた。

坂本美夫氏は昭和51(1976)年に刊行した『甲斐考古』別冊2号(註6)の中で、盤竜鏡と管玉の実測図を掲載した上で、盤竜鏡が古墳時代前期から中期に多く見られるものであること、管玉が細管状で碧玉製である点から、弥生時代

の形態を保ち、しかも他の種類の玉類が見られないことから、管玉のみの首飾りであることを想定し、古墳の年代の下限の参考としている。しかしこれらの他に、現在は所在不明である直刀残片・矛残片・鏃・鑿(?)の類が出土したとされる点から、その組み合わせに着目し、東八代郡豊富村に所在する王塚古墳以前の前Ⅳ期(5世紀前葉)に築造されたと推定している。

さらに出月洋文氏は、昭和50・51(1975・76)年度に山梨大学考古学研究会が作成した本古墳の墳丘実測図を『丘陵』第9号に発表し(第2図)、本文中で『東八代郡誌』(註7)の記述や地元の人々の聞き取りから、「本古墳が前方部のごく小さな前方後円墳、あるいは帆立貝形の墳形」である可能性があることを提起した(註8)。

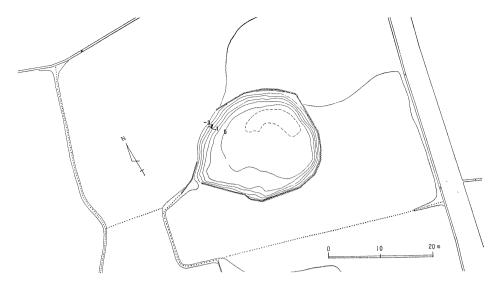
## 3 管玉について

第3図は今回新たに作成した管玉実測図である。合計53 点が確認されている。このうち5点は破損しているが、4 点は修復されている。また写真1はX線写真である。

長さは 1 cm以下のものが11点、  $1 \text{ cm} \sim 1.5 \text{cm}$ のものが40点、1.5 cm以上のものが2 点認められる。直径は $0.3 \sim 0.4 \text{cm}$ の範囲に収まる。いずれも細く、径は一定しているが、長さはばらつきが見られる。



第1図 亀甲塚古墳位置図



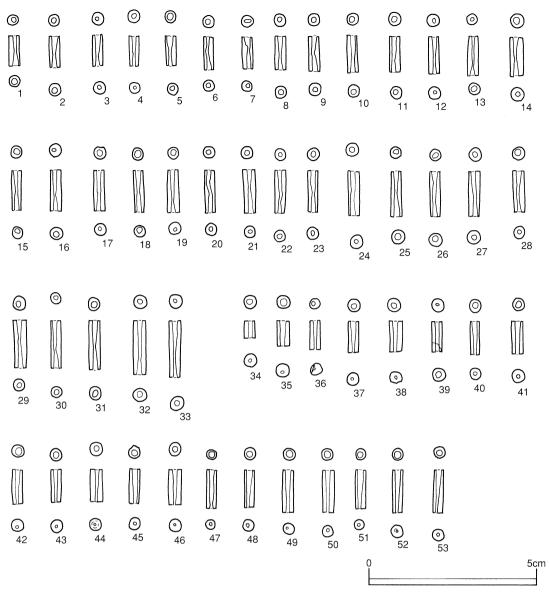
第2図 墳丘実測図(S51 山梨大学考古学研究会作成)

番号	長さ	径	色調	穿孔方法	その他	番号	長さ	径	色 調	穿孔方法	その他
1	0.90	0.30	明緑	両側		28	1.25	0.35	緑灰	両側	
2	0.90	0.35	明緑	両側		29	1.45	0.40	淺黄緑	両側	
3	0.90	0.40	明緑	両側		30	1.45	0.30	淺黄緑	両側	破損
4	0.90	0.30	淺黄緑	両側		31	1.50	0.35	緑灰	両側	
5	0.90	0.30	濃緑	両側		32	1.65	0.40	濃緑	両側	破損
6	1.00	0.30	明緑	両側		33	1.70	0.35	緑	両側	破損
7	1.00	0.30	淺黄緑	両側		34	0.50	0.35	明緑	片側	
8	1.00	0.35	緑	両側		35	0.70	0.40	濃緑	片側	
9	1.05	0.30	淺黄緑	両側		36	0.90	0.30	濃緑	片側	
10	1.10	0.35	緑	両側		37	0.90	0.35	濃緑	片側	
11	1.10	0.35	緑	両側		38	0.90	0.40	濃緑	片側	
12	1.10	0.35	明緑	両側		39	0.90	0.35	明緑	片側	破損
13	1.20	0.35	濃緑	両側		40	1.00	0.30	濃緑	片側	
14	1.20	0.40	緑	両側		41	1.00	0.35	緑	片側	
15	1.20	0.30	緑	両側		42	1.00	0.35	まだら明緑	片側	
16	1.20	0.30	明緑	両側		43	1.00	0.30	緑	片側	
17	1.20	0.35	まだら明緑	両側		44	1.00	0.35	濃緑	片側	
18	1.25	0.35	濃緑	両側		45	1.10	0.35	まだら明緑	片側	
19	1.30	0.40	緑(明緑筋混じる)	両側		46	1.10	0.40	濃緑	片側	,
20	1.30	0.35	濃緑	両側		47	1.15	0.30	緑	片側	
21	1.30	0.35	明緑	両側		48	1.15	0.30	明緑	片側	
22	1.30	0.35	濃緑	両側		49	1.30	0.35	明緑	片側	
23	1.30	0.30	明緑	両側		50	1.30	0.35	明緑	片側	
24	1.30	0.35	明緑	両側		51	1.20	0.30	淺黄緑	片側	
25	1.40	0.40	緑	両側		52	1.30	0.35	緑	片側	
26	1.40	0.30	まだら明緑	両側		53	1.30	0.30	緑	片側	破損
27	1.40	0.35	緑	両側					110-111		

第1表 管玉計測表

石材はいずれも碧玉製である。色調は緑色を呈するが、肉眼観察では濃緑色・緑色・明緑・浅黄緑 4 種類に分類が可能である。この色調の格差は、石材の違いであると推測される。とくに特徴的な浅黄緑色の管玉の一群は、それぞれの玉で、石材のまだらな状態も共通しており、これらは同じ石材から作り出された可能性がある。明緑色も同様である。濃緑色・緑色については、色調以外にこれといった特徴が見られず、一概に同じ石材であるとは断定しがたい。穿孔方法は、両側から穿孔されたものが33点見られる。一方片側から穿孔されたものは20点である。第3図1~33

は、両側から穿孔された管玉である。孔の直径はおおよそ 1.5~2.0mmで、玉の中央付近で孔が結合している。1.5cm以上を計る管玉 2 点も両側から穿孔される。一方34~53は、片側から穿孔されたものである。始点部分の径は大きいものでは2.5mmと、玉の壁がかなり薄くなってしまっているものも見受けられる。一方終点部分の径はおおよそ0.3~ 0.5mmである。終点部分は、玉の径が細いこともあってか、非常に丁寧に孔を穿っている様子が窺われ、ほとんどバリが見られなかった。片側穿孔を施した管玉は、長さが1.0~1.3cmのものが14点、0.5~1.0cmのものが 6 点であり、両



第3図 管玉実測図

側穿孔を施した管玉の1.4cm以上 8 点、1.0~1.4cmのもの20 点、0.5~1.0cmのもの 4 点と比較すると、片側穿孔の管玉の方が小さめであることがわかる。これらのことから、管玉作成段階が、片側穿孔が取り入れられて間もない段階であった可能性を窺うことができるのではないであろうか。

### 4 まとめ

このように本古墳出土の管玉は、両側穿孔が施されたものが多数含まれることを確認した。現時点では、穿孔方法に両側穿孔を採用した管玉の一群は、甲府盆地では他に類例が認められない。玉類の穿孔方法は、玉の種類や玉つくり集団、地域差や時間差など、様々な要因によって異なる。管玉に限って見てみれば、おおよそ両側穿孔から片側穿孔へ変遷するという流れは、様々な点で若干の差異があるにせよ、かなり広範囲で共通しているものと思われる。

ところで本管玉の特徴の一つである直径3mm前後のいわゆる細管状の管玉について、触れておこうと思う。本管玉

のように、0.2~0.4cmの径を持つ管玉は、弥生 II 期に上限が求められる。このような管玉を製作した玉つくり遺跡は、第1段階のものとしてとらえ、兵庫県南部から伊勢湾沿岸に遺跡が点在する一方で、日本海側沿岸に沿って密に分布する(註9)。細管状の傾向は、弥生時代を通じて維持され、古墳時代に入っても残存するが、徐々に太管状へと段階的に移行する。

今回取り上げた管玉の特徴は、まず両側穿孔と片側穿孔の両方が採用されていること、さらに細管状であることがあげられる。両側穿孔で細管状であるという特徴はいずれも弥生時代の管玉の様相が色濃く、甲府盆地の管玉の中でも、古相段階に位置づけることが可能であると考えてよい。また具体的にこの管玉の一群が、盤竜鏡と共伴することは年代的にも矛盾はないと考える。

本古墳から出土した遺物は、現在管玉と盤竜鏡しか伝えられておらず、詳細については不明であるが、この管玉と盤竜鏡のみの共伴関係を見る限りでは、現行の築造年代に



写真 1 X線写真

は疑問を感じずにはいられない。また出月洋文氏が述べるとおり、墳丘形態も未だ不明瞭である。内部構造と墳丘形態、これらが明らかになれば、あるいは甲府盆地の出現期の古墳の様相の一端が明らかになる可能性も否定できないと思われる。

今後の亀甲塚古墳の調査に期待する。

拙稿を起こすにあたり、帝京大学山梨文化財研究所畑大介氏・鈴木稔氏・埋蔵文化財センター坂本美夫氏・保坂康夫氏・正木季洋氏にはご助言をいただいた。また帝京大学山梨文化財研究所鈴木稔氏には、管玉のX線写真を撮影していただいた。厚く感謝を申し上げます。

## 註

- (1) 坂本美夫 1978「山梨県・曽根丘陵周辺地域の前期古墳等について」『甲斐考古』別冊2号
- (2) 管玉のX線撮影は、帝京大学山梨文化財研究所の協力により、2002年に実施した。
- (3) 村松真琴 1949「亀甲塚の調査」『郷土研究』 7
- (4) 永峰光一 1950「甲府盆地における古墳出土鏡の新資料」『古代学研究』 1
- (5) 永峰光一 1951「古墳と環境―甲府盆地の場合―」 『国史学』56
- (6) 註1に同じ
- (7) 山梨県教育委員会東八代支会 1914『東八代郡誌』
- (8) 出月洋文 1982「御坂町亀甲塚古墳の墳丘実測調査」 『丘陵』第9号
- (9) 河村好光 1986「玉生産の展開と流通」『生産と流通』 岩波講座日本考古学3

# 山梨県における月待信仰について

## —二十三夜和讚 (一)

坂

本

美

夫

はじめに

二 和讃の概要

はじめに

三 和讃の検討

四 おわりに

○パーセントの分布状況がとらえられ、二大分布圏の存在が浮き彫りとさら月の出をまつ行事」で、その目的が農業生産に根ざした一種の現世利益ら月の出をまつ行事」で、その目的が農業生産に根ざした一種の現世利益の元さた。近世月待塔四二七基の分布からは、北巨摩郡下とその周辺の加えてきた。近世月待塔四二七基の分布からは、北巨摩郡下とその周辺の中巨摩郡地域、それに上野原町、大月市、都留市とその周辺地域について、を求めたものである。このような月待信仰の山梨県における状況について、中巨摩郡地域、それに上野原町、大月市、都留市とその周辺地域について、は、「特定の月齢の夜に人々が寄り合い飲食などをともにしなが月待信仰は、「特定の月齢の夜に人々が寄り合い飲食などをともにしなが

であるが確認することができた。することができ、勤行時に唱えられた念仏、講で使われた諸具など、一部行われていたおさんや講(二十三夜講)の行事形態を断片的であるが確認

一端を明らかにしたい。 な資料となろう。ここに、その記録と若干の検討を加え、月待信仰行事の確認することができた。断片的であった行事形態の復元に、きわめて貴重今回、かって月待信仰の中心的存在の勤行で唱えられたであろう和讚を

## 二 二十三夜和讚の概要

(一) 本の体裁

もちろん本文ともども角が手ずれして、丸く擦り減った状況を窺える。られる。滲みもみられ、また、長年に渡り使用されていたためか、表紙はピーしたものである。本の表紙の材質は不明であるが、格子状の陰影がみこの和讚は、『なむあみだぶつ』と題した和綴じの私本(渡辺茂氏蔵)をコースの和讚は、都留市都留ミュウジアム図書室の蔵書中にあった。

事を行った二十三夜堂の存在、あるいは月待信仰の本尊である勢至菩薩が

い地域においても、寺院の祭礼として月待行事が行われていたり、月待行

れた。しかし、文献、二十三夜堂などからは、石造物の分布の確認できなられるが、相対的には希薄ないし皆無の状況にあることも合わせて確認され、これら以外の地域は、局地的に集中する傾向をとらえられる地域もみ

きされ、二つ折りして綴じられている。本の題名も、手書きされたもので、ので、現在のB五版の大きさにほぼ該当する。本文は、罫紙に墨で仮名書本の体裁は、縦二六、三センチメートル、幅二一センチメートル程のも

月待信仰の具体的行事形態についても、山梨市(旧三富村)徳和地区で

県内の広い地域において月待信仰の行われていた様子を明らかにすることとを推定することができる。このことから、その濃淡は別として、さらに寺院の本尊となっていることなどから、そこに月待信仰の行われていたこ

ができた

裏表紙には「昭和四年」なる印影と所有者名、それに「都留郡盛里村」な れていた地域を特定するうえで重要な点といえよう。 る住所が書かれている。特に住所の書かれていることは、月待信仰の行わ

もいる。県内でもこの他に、 て行われた月待講の勤行で唱えられていた和讚といえるであろう。 いずれかの時点で習合したものといえる。このことから、都留地域でかっ た例といえよう。本例も、盛里村地内で行われていた念仏講と月待講とが 来が日待ちの本尊であることを考えると、日待信仰と月待信仰とが習合し 銘のほかに「帰命頂礼大日如来」なる銘が合わせて彫られている。 所在の二十三夜塔に、習合例がみられる。この月待塔には、「二十三夜供養! 習合し、安産祈願・血不浄の清めを願って念仏を唱えている」と言われて 夜・二十三夜に行われる地区がある。この後者の例では念仏講が女人講と る。そのうち阿弥陀仏を唱える称名念仏では、「日待、月待と習合し、十九 中で唱えられた二十三夜和讚といえる。和讚を唱える講に念仏講などがあ れているもので、これからすれば、念仏講と月待講とが習合した念仏講の は大月市賑岡地区で唱えられている二十三夜和讚も、念仏講の中で唱えら ある。この中の一つとして、二十三夜和讚が納められている。同様な形態 この本は、総頁数七○頁に渡るもので、念仏講の和讚集といえるもので 南アルプス市 (旧八田村) 下高砂神明社境内 大日如

える。 和讚 なものを題材として作られた和讚といえる 域で月待信仰の盛んとなった江戸時代以降に作られたものであろう。身近 この和讚は、七五調を基本とし、一六句からなる。形態としては、「俗の その内容から作られた時代まで特定することはできないが、 の部類に入るものとおもわれ、月待信仰のために作られたものとい 郡内地

(二)和讚の内容

あみだぶあみだぶ 二十三夜 和讚

あみだぶつ

阿弥陀ぶ(仏) 阿弥陀ぶ(仏

阿弥陀仏

なむあみだぶつ

あみだぶつ

てんじくの

きみょう ちょうらい

一十三やの つきさまを つきつきまちる

その人に

ふくとくあたえる

ごせいがん

かいこもあたれば

さくもよし

ふうふは三ふうふ

そろいます

みふうふそろふた

くらをたてます

そのいへに

七とまへ

ばんをくらが

かねぐらで

二ばんをくらが

きぬぐらで

一ばんをくらが

いとぐらで

四ばんをくらが

まいぐらで

阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

帰命項 来

天竺の

月々満ちる 二十三夜の月様を

その人に

ご請願 福徳与える

蚕も当たれば

作くも良し 夫婦は三夫婦

揃います

三夫婦揃うた その家に

七戸(棟か)まへ

蔵を建てます

金蔵で

一番お蔵が

一番お蔵が

三番お蔵が

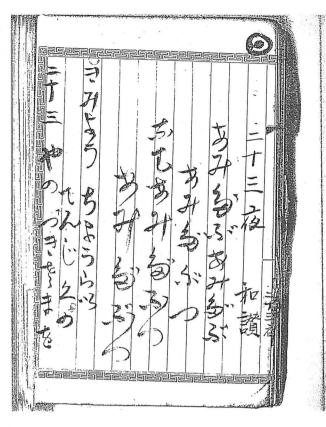
絹蔵で

糸蔵で

四番お蔵が

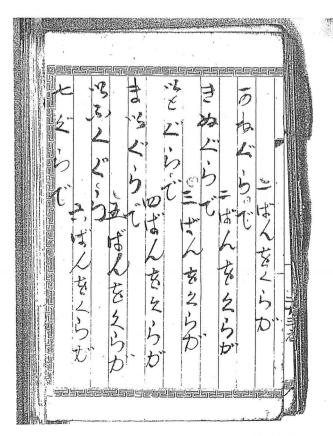
繭蔵で 五番お蔵が

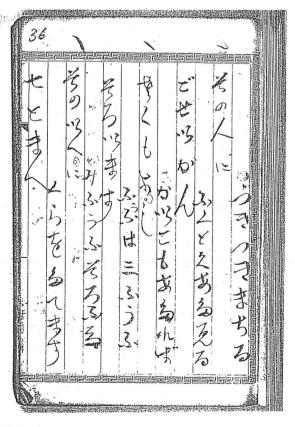
五ばんをくらが



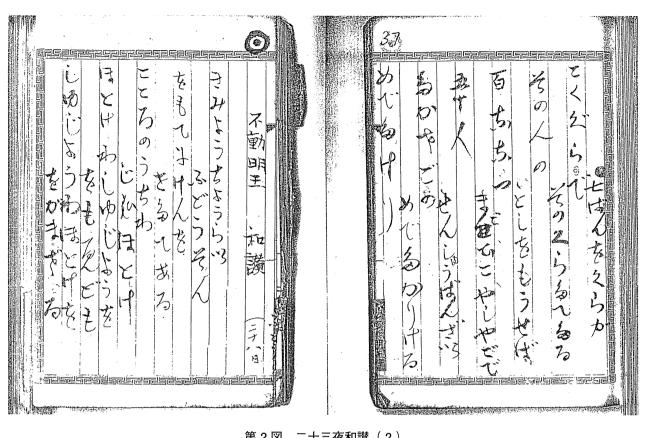


(表紙)





第1図 二十三夜和讃(1)



第2図 二十三夜和讃 (2)

めでたけり

たかさごの

## がそれを現代語に直したものである。

(一)和讚の内容

和讚の検討

次ぎに、和讚の内容について検討を加えてみたい。

来から二十三夜の月様、ご請願とつづく。 後に、月待信仰の本尊への一身の呼びかけ、請願を行う文句となる帰命頂 をかけて頼みごとをする意で、これは念仏で唱えられる文句である。その 文頭にみられる阿弥陀ぶ(仏)から阿弥陀仏まで、仏・菩薩などに一身

ついて、物語的に述べている。まず養蚕の出きがよく収益があがり、作す これ以後は、請願により望みがかなえられるように、いろいろな福徳に

いふくぐら

衣服蔵

六番お蔵が

六ばんをくらが

質蔵で

七ばんをくらが

こくくらで

穀蔵で 七番お蔵が

そのくらたてたる

その人の

その人の その蔵建てたる

としをもうせば 歳を申せば

百七つ

百ななつ

まご、ひこ、やしゃごで

五十人 孫、曾孫、玄孫で

五十人

せんしゅうばんざい 千秋万歳

高砂の

めでたかりける

めでたけり

以上、上段が『なむあみだぶつ』に記された「二十三夜和讚」で、下段

めでたかりける

がある)、五番蔵が衣服蔵、六番蔵が質蔵(貸し付けの際の質草を納めた蔵) 反物を織る絹糸)、三番蔵が糸蔵(木綿の反物あるいはその反物を織る木綿 べている。一番蔵が金 三代が健康なうちに一緒に生活をおくれることへの感謝を表している。そ なはち米などの作物の作柄もよく、豊作であり、 七番蔵が穀蔵(米、麦、雑穀)である してこのような幸福の中で、 四番蔵が繭蔵(「まい」は繭の方言。 (可ね) 裕福の象徴である七つの蔵を建てることを述 蔵、二番蔵が絹蔵(絹の反物あるいはその 「めえかき」などの作業の言い方 しかも、三夫婦といった

続くことを祝い、喜び、目出度いことと讃え、終わりとなる 七歳といった長寿を与えられ、さらに沢山の孫などを得て、反映の久しく このように、その目的が農業生産に根ざした一種の現世利益を求め、 さらに蔵を建てた人物が、三夫婦揃ったということで、現在でも稀な百 講

## 現世利益

を結んで請願したことが確認できる

質蔵 割方、 のうちの蔵について、現在県内に残る民家の屋敷構えなどと比較してみた 納屋蔵は、 記がみられることから、これらが納屋蔵に代わるものといえよう。そして らの中では一例だけである。しかし、これらの屋敷には納屋部屋などの表 れた蔵のうち、特に多いのが文書蔵の八割方、次ぎに穀(米・籾) で、これらの家には付属建物として色々な蔵がみられる。屋敷内に配置さ 現世利益として請願したのは、 。 ここで取り上げる民家は一七世紀前半から明治時代前期までの二〇例 (七・ヒチ)、納屋蔵などがみられる。納屋蔵は、以外と少なく、 味噌 色々な生産物、 (味噌部屋) 蔵の五割方であった。例数が少ないものに座敷蔵、 物品などを収納した蔵と考えられるものといえ 健康、 子孫繁栄、 財物 (蔵) である。 蔵の五 Z

蔵 次ぎにこれらと今回確認された和讚とを比較すると、一致するものは穀 質蔵といった僅かなもに過ぎない。しかし、納屋蔵については、

る

								付属建	物			
民	家	名	住	所	文庫蔵	穀蔵	質蔵	付属建 味噌蔵		納屋蔵	年	代
	=		-1- <del>-</del>					小小日成	圧敖戚	州庄戚		口铁水
上野正			山梨市東			榖蔵_	質蔵	_ 1 _ 16 _ 46				记前半
萩原貞	夫氏	住宅	春日居町鎮	[目	文庫蔵	榖蔵		味噌蔵	座敷蔵			记中期
竹井義	明氏	住宅	塩山市三日	市場	文庫蔵	榖蔵					17世紀	记後半
風間朔	太郎	氏住宅	塩山市千野	5	文庫蔵							记前半
八田政			石和町八田		文庫			味噌蔵				记後半
大須賀	和夫	氏住宅	境川村石橋	i j		米蔵	ヒチ蔵					记末期_
塚田一			豊富村高部					味噌蔵				己末期
神田泰			増穂町舂米	=	文庫蔵						19世紀	己前半
安藤勢			甲西町西南	i湖	文庫倉							己前半
		住宅	甲西町鮎沢	Į	文庫蔵						17世紀	记後半
穂坂鶴			櫛形町高尾					味噌蔵			明治前	<u> </u>
矢崎徹			白根町有野	;	文庫蔵						17世紀	己前期
内田正			玉穂村極楽		文庫蔵	榖蔵		味噌部屋				己中期
中島克			八田村野牛	-島		穀倉		味噌蔵		納屋蔵	19世紀	己前期
中島信	-		双葉町宇ノ		文庫蔵		-		座敷蔵		18世紀	己中期
名取倭			韮崎市穂坂			榖蔵		味噌蔵	座敷蔵			己中期
八代英			明野村上手		文庫蔵							己初期
風間巌			武川村牧原	Ţ		榖蔵		味噌蔵				己前半
		氏住宅	富士吉田市	上吉田				(味噌蔵)				己末期
星野竒			大月市大月		文庫蔵	籾蔵		味噌蔵			19世紀	己前半

第1表 県内民家の付属建物

とを確認できる。 に根差したもので、かつ周辺にみられる裕福のシンボル的物資であったことしたものと考えられる。従って、請願の対象となったものが、生活の中の中に納められたものを一つずつ具体的に絹蔵、糸蔵、繭蔵、衣服蔵などのようにいろいろな物を収納したものと考えられることから、和讚ではこのようにいろいろな物を収納したものと考えられることから、和讚ではこ

## (三) 和讚中にみられる印しについて

## 六 おわりに

本和讚との比較を行い、内容、地域性の有無などを検討してみたい。町地区で、二十三夜の和讚が唱えられていることが確認できている。今後、復元には欠かせない資料となろう。和讚については、現在でも大月市賑岡て取りあげてきた。現在は行われていないが、月待信仰で行われた勤行の都留市域にある旧「都留郡盛里村」で行われていた月待信仰の和讚につい

助、ご教示を賜った。厚くお礼申しあげたい。最後に、調査に際して渡辺茂、岩村善吉、杉本悠樹、堀内享の各氏にご援

# 一 桜井徳太郎 「月待」『日本歴史大辞典』 昭和三七年。

- るようである。

  おいのである。

  おいのである。

  おいのである。

  おいのである。

  おいのではないが、月待塔の集中がみられる地域といえま。

  まいの山梨市においても多くの追加の確認があり、盆地東部も盆地西となった。特に旧須玉町、旧明野村での追加数が増えた。また、盆地となった。特に旧須玉町、旧明野村での追加数が増えた。また、盆地るようである。

 $\equiv$ 

て―」『研究紀要』一五 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財セン拙稿 一九九九「山梨県における月待信仰について―文献を中心とし

県埋蔵文化財センター二十三夜堂を中心に─」『研究紀要』一六 山梨県立考古博物館・山梨出稿 二○○○「山梨県における月待信仰について─塩山市小屋敷の

会 へや講を中心として―」『山梨県考古学協会誌』 一五 山梨県考古学協四 拙稿 二〇〇〇「山梨県における月待信仰について―三富村徳和のおさ

## 五 註一に同じ

六 多屋頼俊 一九三三『和讚史概説』 法蔵館

山梨県教育委員会 二〇〇〇『山梨県の民家』

七

山梨県史編纂委員会 二〇〇〇『山梨県史』文化財 山梨県

1   上   1   友   答		自然石型	二十六夜塔	上神取					大喬句反
享和元辛酉天				妙覚寺	八 廿二夜尊	一八四六	角柱型	二十二夜塔	八巻
奉唱御題目千龍二十六夜供養塔	八〇一	自然石型	二十六夜塔	上神取	ョ二十二夜供養				
(3)十月日					当村善女人講中				根古屋神社北
(				公民館前	(如意輪観音坐像)	一七九一	角柱型	二十二夜塔	両組
(口意倫覞音象) 横寛政十二度年	八〇〇	丸彫型	二十二夜塔	中込	当村六人				
二十三夜					講中				
<b>八</b> 供養塔					(3)施主				正覚寺
二十二夜			二十三夜塔	道祖神場	八   二十三夜供養塔   懺安永五酉天十一月吉旦	一七七六	角柱型	二十三夜塔	御門
寛政十二年庚申三月吉日	八〇〇	自然石型		三之蔵					塩川神社
ョ 十二夜待 講中					二十三夜塔 懒十一月吉日	一七六九	角柱型	二十三夜塔	塩川
(如意輪観音像)		Ш́			同五人				
欄干時 寛政八稔 質政八稔 原仲春日	一七九六	角柱型	二十二夜塔	浅尾新田	有井九左衛門				
天明六丙午歳仲冬吉辰建之也					四 二十六夜供養 : : : : : : : : : : : : : : : : : : :	一七六四	箱型	二十六夜塔	神戸
(聖観音立像)				長清寺	信心 施主中				
二十二夜供養	一七八六	舟型	二十二夜塔	小笠原					
印奉待二十六夜供 羪					七夜待供 憩塔    頁二   二寸完				道祖神場東
(勢至菩薩坐像) 講					五	一七五五	角柱型	七夜塔	根古屋
懒元文五庚申陽 偒吉辰	七四〇	笠付型	二十六夜塔	浅尾新田	② ョ四月八日 二十人				少林寺
元文五丙申陽腹吉辰					奉造立勢至著			(勢至菩薩)	大蔵
(勢至菩薩坐像)				石塔庵跡	九 〇	一六八九	唐破風笠付	二十三夜塔	旧須玉町
奉待二十六夜供養	一七四〇	笠付型	二十六夜塔	浅尾新田	元月日 五人				
国土安全 霜月二十三日					二十一夜待供養				
奉待帰明月天子二十三夜供養				妙覚寺	宝暦 年 講中		箱型	二十一夜塔	下久保墓地
天下泰平 享保七壬寅歳	七	箱型	二十三夜塔	上神取					
七夜待供養					1师				
(如意輪観立坐像)					正徳□□□ 施主				
正徳五年未八月	七 五	舟型	十七夜塔	北組	□立之				
本願主	,				印奉造庚申供養塔				
干時正徳三癸巳歳六月十三日					各施主				
具足心大歓喜者己誉					□立之				
右願主男女一結祈除災祈願					觸奉造立三夜供養				
奉誦惣持□三百三十六巻成就				稚蚕所前	各施主				
七稔成就處		<u>Ш</u>	(読誦塔)	浅尾新田					
奉敬待四節七夜大月天子	七一三	角柱型	十七夜塔	旧明野村	養				
		į		篠原方前	奉順礼百番観世音菩		2 有 表	- - - - - - 1	下久保墓地
<b>*</b> 奉供養廿六夜待		==	二十六夜塔	平	共		rii l	Ξ.	開 尺 IT
<b>金</b>	年代	形式	種類	所在地	盆	年代	形式	種類	所 右 地

二十三夜		自然石型	二十三夜塔	歌田
十三夜(背) 中田三夜(背) 一番に神風の 一番に神風の 草 中田		面 自然石碑	二十三夜塔	万力 諏訪神 社
二十三夜 懒磯野丑太郎 日野原善作 二十三夜 懒磯野丑太郎 田草川房太郎 飯島良蔵 飯島形太郎 田草川房太郎 近島良蔵	一 九 二 二	自 然 石 型	二十三夜塔	一 不 丁 動 田 尊 中
二十三夜 (横)明治二『五月日	一八六九	自然石型	二十三夜塔	下神内川
恵稇寺康重  三月十三日	一八六八	自然石型	二十三夜塔	西一二三七番地
○二十三夜 臼嘉永五≒歳九月廿三日	一八五二	舟型	二十三夜塔	市川 金比羅神社
<b>共</b> 廿三夜	一八二六	自然石型	二十三夜塔	一八四番地
-    F E				
(E)				
七夜待供養 享和二戌年				番地先上岩下八四
横	一八〇二	角柱型	七夜塔	山梨市
二十三夜		自然石型	二十三夜塔	祖師堂横
待			(勢至菩薩)	北向地蔵
□暦十三 <sup>変</sup> 星	一七六三	箱形式	二十三夜塔	日 前 在 地
名				Ē.

大月市 旧中道町 旧勝沼町 扇山山道 旧秋山村 旧上野原町 中野畑隅 バス停 西原田和 所 心経寺 二十六夜山 (辻方前) 在 地 二十三夜塔 | 自然石形 | 一七五〇 二十三夜塔 | 自然石型 | 一八三三 二十三夜塔 | 自然石型 二十六夜塔 自然石形 一十六夜塔 |十三夜塔| 箱型 種 類 自然石 形 定 一八八九 | 二十六夜 明治廿二年丙九月日 一八七六 年 代 十一月日 中 二十三夜塔 講 廿三夜 廿六夜塔 廿三夜塔 供養念三夜講中 寛延三年 西原 (人名) 午九月吉日 神職武井京象謹書 機明治九年 31七月九日 銘 文

須玉町 二〇〇一 『須玉町史』社寺・石造編山梨市 二〇〇一 『山梨市の石造物』 明野村 一九九五 『新装 明野村誌』石造物編 明野村は、踏査のほか、次の文献から取り上げた。

## 研究紀要1号~21号執筆者一覧

1号 坂本美夫 甲斐の郡 (評) 郷制 中山誠二 甲斐弥生土器編年の現状と課題 新津 健 金生遺跡発見の中空土偶と2号配石 一時間軸の設定一 小林健二 外来系から在来系へ一甲斐のS字甕の変遷ー 小野正文 縄文時代早期・前期初頭の土器について 一釈迦堂遺跡群を中心として一 森 和敏 柱の礎石のある竪穴式住居址 森原明廣 山梨県地域における内耳土器の系譜 2号 保坂康夫 山梨県下の先土器時代資料の検討-1-平山 優 甲府城の史的位置ー甲斐国織豊期研究序説ー 小野正文 所謂四錐形十偶に就て 坂本美夫 山梨県における月待信仰について 新津 健 石剣考 -特に石造物の展開を中心として-一中部、関東を中心とした出土状況から一 甲斐における弥生文化の成立 中山誠二 10号 長沢宏昌 甲府盆地周辺にみられる縄文時代中期の土壙墓 坂本美夫 辻金具·雲珠考 と十器棺再葬墓 一井戸尻Ⅲ式~曽利Ⅰ式期の場合-3号 長沢宏昌 縄文時代前期末~中期初頭の土器底部にみられ 五味信吾・野代幸和 る編物痕について 山梨県北巨摩郡大泉村甲ッ原遺跡出土琥珀の産 田代 孝 山梨の三角 壔形土製品 地同定(1) 一赤外吸収スペクトル分析-末木 健 甲斐国巨麻郡の成立と展開 金生遺跡出土の土器 2 (晩期) 新津 健 甲斐国府ーその環境と展望ー 坂本美夫 高橋みゆき 山梨県東八代郡中道町金沢出土の土師器 醸について 笠原安夫・藤沢 浅 11号 宮里 学 上の平遺跡住居址から出土した炭化種子の同定 縄文時代の石器再考-打製石斧(1)-長沢宏昌・中山誠二 田代 孝 中世六十六部聖の奉納経筒について 付記 種子検出方法と、検出種子の意義について 柏木秀俊 近世軒平瓦の分類について一甲府城を例にして一 高野玄明 県道塩平~窪平線拡幅工事に先立つ牧丘町曲田 4号 長沢宏昌 山梨県内出土縄文土器の底部圧痕について 遺跡調査報告 中山誠二 弥生時代終末における上の平遺跡の集落構造 小野正文 甲府市八幡神社採集の縄文土偶 小林広和 縄文時代の土壙について 12号 坂本美夫 剣菱形杏葉類の階層制とその背景 5号 末木 健 甲斐仏教文化の成立 吉岡弘樹 経塚古墳についての予察 森 和敏 甲府盆地における条里型地割の事例 柏木秀俊 近世軒丸瓦の分類について一甲府城を例として一 佐野和規 山梨県考古資料の教材化 6号 浅利 司 絡条体圧痕文を有する土器について 一学校現場へのアンケート調査に基づいて~ - 中込遺跡出土の資料を中心に-歴史教育実践と考古学の関連についての一考察 澤脊正仁 森原明廣 関東地方におけるカマド初現をめぐって - 考古学の成果を取り入れた授業から考えたこと-保坂康夫 立石遺跡発掘調査報告 大谷満水 ユング心理学を導入した縄文時代の渦巻文の解釈 -1989年国道358号線拡幅等に伴う調査-河西 学 立石遺跡での先十器遺物を包含する地層 13号 田代 孝 近世の回国塔と回国納経 長沢宏昌 都留市中谷遺跡出土の縄文土器底部圧痕について 7号 中山誠二 身洗沢遺跡における外来系土師器の諸例 保坂康夫 山梨県下の遺跡・住居址数変動と通史的理解 今福利恵 身洗沢遺跡出土の木製品 大庭 勝 考古資料の教材化についての一考察 千野裕渞 身洗沢遺跡出土木製品の樹種について 松谷暁子 身洗沢遺跡出土の植物種子について 14号 新津 健 山梨における後晩期土偶の展開 外山秀一 山梨県身洗沢遺跡の立地環境と稲作 山本茂樹 清里バイパス第1遺跡の陥し穴の若干の検討 森 和敏 4基の前方後円墳の設計-山梨県における-8号 新津 健 金生遺跡出土の土器1(後期) 野代幸和・鈴木由香 出月洋文 両の木神社遺跡出土の須恵器長頸瓶について 八代町瑜伽寺遺跡および山梨市七日子 (廃寺) 間島信男・河西 学・保坂康夫 遺跡出土遺物について 山梨県甲府市相川河床から発見されたナウマン 石神孝子 甲斐における古墳時代中期の墓制について ゾウ臼歯化石について - 曽根丘陵の円形低墳墓-松谷暁子・長沢宏昌 明野村中村道祖神遺跡出土炭化物について 15号 李 映福 長江デルタ地帯における新石器時代文化集団の 移動および縄文文化へのその影響 9号 磯貝正義 いわゆる「東国造」について 野代幸和 縄文時代前期後半から中期初頭段階における異 保坂康夫 礫群と個体消費の関わりについて 系統土器の流入の様相について 今福利恵 勝坂式土器成立期の集団関係 一山梨県に見た出土事例を中心に一 新津 健 縄文時代中期後半の集落② 縄文時代前期板状土偶から中期河童形土偶へ 市川恵子 - 千葉県高根木戸遺跡の構造と意義-- 御坂町桂野遺跡出土土偶に関する一考察-

末木 健

縄文時代生産活動と石器組成分析

一山梨県における遺跡の継続性と立地から一 坂本美夫 山梨県における中・近世石塔資料 山本茂樹・網倉邦生 甲ッ原遺跡発掘調査報告 18号 新津 健 縄文中期釣手土器考② (平成10年3月3日から3月26日) 笠原みゆき 塩瀬下原遺跡出土の敷石住居跡について 小林公治・吉川純子・樋泉岳二 三森鉄治 山梨県内における出土銭貨の現状と課題 大月市御所遺跡から検出された動植物遺体とその 小林 稔 鰍沢河岸跡出土の泥面子について 性格(1) 宮久保真紀 甲府城内葡萄酒醸造所について 笠原みゆき 大月遺跡の敷石住居跡について -国産ワインの発祥地甲府-保坂康夫 御勅使川扇状地の古地形と遺跡立地 樋泉岳二・小林公治 - 中部横断道の試掘調査の成果から-大月市大月遺跡(第7次調査)出土の動物遺体 河西 学 中部横断道試掘調査のテフラ分析 興水達司 横針前久保遺跡出土黒曜石のフィッショントラ 塩山市西田遺跡B区2号住居跡出土土器の再整理 小林健二 ック年代測定 石神孝子 山梨市牧洞寺古墳採集の須恵器について 坂本美夫 山梨県の中世石仏 雨宮加代子 山梨県内出土木製品について -地蔵石仏(光背形)を中心として-崎田 哲 甲府城の鬼門守護と除災招福の思惟 19号 保坂康夫 -稲荷曲輪にみる一考察-台形様石器にみられる「急角度微細加工」の実 坂本美夫 <資料紹介>高根町箕輪横森前墓地所在の地蔵 陽刻板碑 三田村美彦 山梨の縄文時代早期沈線文土器群終末期前後の 山梨県における月待信仰について 版本差去 給計 一文献を中心として一 小野正文 山梨県の木島式土器について 網倉邦生 天神遺跡出土石匙の起源と系譜 山梨県における縄文時代早期末の様相 長沢宏昌 16号 長沢宏昌 山間地の漁労と打欠石錘の用途 一国中地域と郡内地域一 新津 健 上の平遺跡出土の動物装飾付土器とその周辺 小林公治・中野益男・中野寛子・長田正宏 五味信吾 山梨県北巨摩郡大泉村甲ッ原遺跡出土琥珀の産 磨石・鼓石類、石皿と注口土器の使用法に関する一事例 地同定(2)ーその後の研究成果とともに-一大月遺跡出土縄文土器・石器に対する残存 野代恵子 音の鳴る土偶(2) 脂肪分析結果と考古学的検討ー ~ '笛'という機能の可能性~ 野代恵子 方形周溝墓にみられる儀礼的廃棄に関する一視点 今福利恵 (研究メモ) 山梨県における勝坂式土器後半期 - 境川村諏訪尻遺跡の事例より-の素描 保坂康夫 東原遺跡の平安時代集落の構造 小林広和 渦巻把手状装飾土器の展開 - 実年代軸の設定と集団表象論の試み-- 渦巻突起連結土器から渦巻把手土器へ-横森赤台(東下)遺跡出土五輪塔の形態と製作 野代幸和 三森鉄治 米倉山B遺跡出土六道銭と煙管・火打金に関す 年代について る基礎的研究 宮里 学 県指定史跡甲府城跡の地鎮祭痕 長田 泉・寺川政雄・宮里 学 - 数寄屋勝手門周辺の遺物集中地点とその意味-稲荷櫓台工事における強度試験監視計測について 雨宮加代子 考古博物館カルチャークラス「銅鏡づくり教室」 楠間美季江 矢穴に関する一考察一甲府城跡石垣の事例より一 での銅鏡の製作について 宮久保真紀 甲府城跡葡萄酒醸造所生徒に関する諸史料につ 坂本美夫 山梨県における月待信仰について いて -塩山市小屋敷の二十三夜堂を中心に-浅川一郎 甲府盆地の液状化に関する資料 村石眞澄 土層堆積観察記録の課題 17号 三森鉄治 道々芽木遺跡の土馬と土馬祭祀の起源 野代幸和 土器に施された文様とその意味について(一試案) 宮久保真紀 甲府城築城における一条小山の選地について - 中国西南地域の少数民族衣装等に見られる - 蔵風得水の思想と甲府城-その文様から一 保坂康夫・望月明彦・池谷信之 北垣聰一郎 丹波山村『お松ひき』にみるソリについて 黒曜石原産地と石材の搬入・搬出 雨宮加代子 動物形土製品の来館者によるアンケートから 一丘の公園第2遺跡の原産地推定から一 ~これは何に見えますか?~ 三田村美彦 山梨における早期沈線文土器群後半の様相 坂本美夫 山梨県の中世石仏-塩山市延命院の十三仏--談合坂遺跡出土土器の検討を通じた予察-弥生時代の大形打製石斧は農耕具か 20号 保坂康夫 田口明子 天神堂遺跡の礫群・配石 一山梨県出土事例をもとに一 渡辺 誠 人面・土偶装飾付有孔鍔付土器の研究 依田幸浩 御勅使川扇状地北部の集落展開について 小林広和 渦巻把手状装飾土器の末裔 一大塚遺跡・石橋北屋敷遺跡を中心に一 今福利恵 甲斐国巨麻郡における古代牧についての一視点 大渓遺跡における副葬石斧への理解 坂本美夫 山梨県の中世石仏一六地蔵石幢(単制)一 小柳美樹 - 「中国四川省古代文物展」を通じて-21号 渡辺 誠 吉岡弘樹 塩瀬下原遺跡出土の釣手土器について 人面装飾付釣手土器の再検討 埋蔵文化財センターが行う学校への教育普及活 末木 健 甲斐と河内と馬 湯川修一 動に関する一考察 今福利恵 甲斐国山梨郡・八代郡・都留郡における古代牧 - 「総合的な学習の時間」にどのように対応し についての一視点 たらよいかー 山梨県の中世地蔵一地蔵塚地蔵石仏一

坂本美夫

田中宗博

発掘調査と並行した資料普及活動に関する一考察

新津 健

縄文晩期後半遺跡分布の意味と課題

## 研 究 紀 要 22

発 行 日 2006年3月31日

編集・発行 山梨県立考古博物館

山梨県埋蔵文化財センター

〒400-1508 山梨県甲府市下曽根町923 TEL 055-266-3881・055-266-3016 E-mail:kouko-hak@pref.yamanashi.lg.jp

(考古博物館)

E-mail: maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp

(埋蔵文化財センター)

印 刷 株式会社 ヨネヤ

# BULLETIN OF YAMANASHI PREFECTURAL MUSEUM OF ARCHAEOLOGY & ARCHAEOLOGICAL CENTER OF YAMANASHI PREFECTURE NUMBER 22 CONTENTS MARCH 2006

A study of Jomon age vessels antheropomorphic decorations		
in Yamanashi Prefecture	Makoto Watanabe	1
Reconstruction of Round-Gravel Rectangles		
—Flagstone-Floored House at <i>Shiozeshimohara</i> Site—	Takeshi Sueki	11
Flaking technique in Jomon period		
—Analysis about obsidian cores excavated at Sakenomiba site—	Yasuo Hosaka	27
A memorandum of the Kinai Style Jar excavated in Yamanashi Prefecture		
—From the excavation in <i>Shiobe</i> Site, Kofu City—	Kenji Kobayashi	35
The arrangement of Kuda-tama excavated in Kamenokoh zuka-Kofun,		
Misaka town of Fuefuki City	Takako Ishigami	41
A study on Religious Beliefs of "Tsukimachi-shinko" in Yamanashi Prefecture		
-Psalms on "Niju-sanya", Twenty-third Moonlit Night-	Yoshio Sakamoto	54 (1)